２０２２（令和４）年度

全国地域青年「実践大賞」

報　告　書

全国地域青年「実践大賞」とは

全国の青年たちによる主体的なの実践を掘り起こして紹介し、そして次の活動への励みになることを目的に日本青年団協議会と一般財団法人日本青年館が主催となり、毎年実施している顕彰制度です。

私たちは、様々な地域で展開される特色ある実践を集めることで、相互に学び合い、地域での活動や青年たちの生活をより豊かにすると確信し、この顕彰制度を実施しています。

主　催

日本青年団協議会、一般財団法人日本青年館

目　　次

１．応募実践・結果一覧表 ……１

２．応募作品実践概要・審査員講評
◆地域活動の部 ……４

◆教宣活動の部 ……１４

◆特別賞　田澤義鋪賞 ……２１

全国青年団ＯＢ会奨励賞 ……２２

３．番外編
◆教宣作品展示会 ……２５

◆表彰式 ……２７

◆雑誌「社会教育」連載「地域×若者＝社会教育」……２８

４．資料集編（表彰団体提出書類の一部抜粋）
◆地域活動の部 ……３２

◆教宣活動の部 ……５８

◆特別賞　田澤義鋪賞 ……６８

全国青年団ＯＢ会奨励賞 ……７８

２０２２（令和４）年度全国地域青年「実践大賞」応募実践結果一覧表

審　査　会	２０２３年２月２日（木）　１３時～　日本青年館５階青年団ルーム
審　査　員	萩　原　建次郎　氏（駒澤大学教授） 齊　藤　千　春　氏（元日本青年団協議会副会長） 佐　溝　剛　至　氏（中日新聞東京本社広告局局次長） 桐　山　理　惠　氏（デザイナー） 上　原　幸　子　氏（武蔵野美術大学教授） 澁　谷　　隆　氏（一般財団法人日本青年館公益事業部部長） 棚　田　一　論　　（日本青年団協議会事務局長）
進　　行	四至本　鈴　香　　（日本青年団協議会総務部事務局員）

◆受賞結果

＜地域活動の部＞

実践大賞	小豆島町青年団 （香川県）	～小豆島あんどんまつり～ SDGs のヒカリでミライをともそう～
準実践大賞	南陽青年団 （山形県）	令和４年度置賜地区高校生まちづくりワークショップ
実践奨励賞	新見公立大学　ヤヒロラボ （静岡県）	静岡県島田市川根町災害復旧支援活動
	高知県青年団協議会 （高知県）	「劇団高知家青年団」の歩み
支援実践賞	該当なし	

＜教宣活動の部＞

教宣大賞	舞鶴町青年会 （大分県）	舞鶴町青年会新聞 ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介
準教宣大賞	羽咋市青年団協議会 （石川県）	団員募集
教宣奨励賞	日野町連合青年会 （滋賀県）	広報活動 機関紙「ひのせいねん」

＜特別賞＞

田澤義鋪賞	舞鶴町青年会 （大分県）	青年が活躍する活力あるまちづくり
全国青年団ＯＢ会奨励賞	もりやま青年団 （滋賀県）	フォト映えスポット@こんにちワーク （教宣　グッズ）

◆応募実践

＜地域活動の部＞

No.	道府県名		市町村名	団体名	活動の名称
1	6-1	山形県	南陽市	南陽青年団	令和４年度置賜地区高校生まちづくりワークショップ
2	9-1	栃木県	宇都宮市	とちぎボランティアネットワーク	第７回サンタdeラン＆クリーン
3	19-1	福井県	鯖江市	鯖江市連合青年団	さばえオータムフェアの開催　～NEXT　SABAEでの活動～
4	22-1	静岡県	島田市	新見公立大学　ヤヒロラボ	静岡県島田市川根町災害復旧支援活動
5	25-1	滋賀県	竜王町	ＣＲＥＷ　Ｒ.Ｓ.竜王町青年団	小学生向けお仕事体験活動「わくわくワーク’２２」
6	33-1	岡山県	岡山市	岡山県青年団協議会	スポGOMIｉｎ岡山
7	37-1	香川県	小豆島町	小豆島町青年団	～小豆島あんどんまつり～SDGs のヒカリでミライをともそう～
8	39-1	高知県	県内各市	高知県青年団協議会	「劇団高知家青年団」の歩み
9	44-1	大分県	舞鶴町	舞鶴町青年会	青年が活躍する　活力あるまちづくり

＜教宣活動の部＞

No.	道府県名		市町村名	団体名	活動の名称
10	18-1	石川県	羽咋市	羽咋市青年団協議会	団員募集
11	25-2	滋賀県	日野町	日野町連合青年会	広報活動 機関紙「ひのせいねん」
12	25-3	滋賀県	日野町	日野町連合青年会	町民駅伝大会 （教宣　チラシ、ポスター）
13	25-4	滋賀県	守山市	もりやま青年団	フォト映えスポット@こんにちワーク （教宣　グッズ）
14	44-2	大分県	舞鶴町	舞鶴町青年会	舞鶴町青年会新聞
15	44-3	大分県	舞鶴町	舞鶴町青年会	ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介

１０県からの応募　地域活動９件　教宣活動６件（計１５件）

教宣活動の部応募状況　機関紙２件、Web・SNS１件、チラシ２件

地域活動の部

実践概要　・　審査員講評

９県から９実践の応募がありました

※審査員の講評以外は、提出資料のアピールレポートや推薦書から抜粋しています。

実践大賞

…活動に常時または定期的に取り組み、地域に大きく貢献し、集められた実践の中で最も優れた実践に取り組んだ団体に授与されます。

小豆島町青年団（香川県）

応募実践名	～小豆島あんどんまつり～SDGs のヒカリでミライをともそう～		
実　施　日	2022年6月30日 ～ 7月16日	会　　場	土庄八幡神社 ・ 内海八幡神社
関係者数	50 人	参加者数	100 人

概　要

コロナ禍で子供たちの活躍の場が失われたため、子どもたちが主役となれるような楽しめるイベントを協力隊員と企画。郷土愛を育めるよう、近年始まったばかりの夏詣と連携したあんどんまつりを行いました。あんどんの製作は、町役場を通じて島内の各学校に呼びかけ、家庭にある牛乳パックを活用しました。団員で模索した制作方法のため、小豆島特産のオリーブや観光名所が描かれたあんどんの絵柄はきれいに島の夜を照らしました。

推薦団体：香川県連合青年会から

小豆島あんどんまつりは地域に根ざした新しい形の活動であり、元々あった伝統を活かした活動です。全世代に対し、社会・地域教育として、小豆島町の大きな一歩となる活動です。SDGs の観点もあり、未来に向けた持続性的な活動になっていくものとして大変期待しております。

審査員の講評

実践大賞の受賞おめでとうございます。コロナ禍で自由に外へ出られない子どもたちに対する、地域の伝統を活かした実践活動として、多くの審査員から高く評価されました。あんどんの作成テーマを「小豆島」として、小学生たちに島にまつわる絵やメッセージを描いてもらい郷土愛を育むこと。SDGsについて考えてもらうきっかけとして、使用済みの牛乳パックを材料にしたこと。いずれも自然に受け入れられる秀逸なアイデアで、アピールレポートからも、あんどんの灯や子どもたちの笑顔が浮かんできました。初めての開催で、全体のスケジュール設定、小学校への作成依頼や管理、保存、600 個あまりの取り付け作業など、苦労は多かったと思います。この成果は団員皆さんのスキルや団結力があってこそのもので、地域の方々にも熱意が伝わったのではないでしょうか。

今年もたくさんのあんどんが、あたたかいヒカリで小豆島と豊島のミライを灯してくれることを期待しています。

準実践大賞

・・・実践大賞に次いで優れた実践に取り組んだ団体に授与されます。

南陽青年団（山形県）

応募実践名	令和4年度置賜地区高校生まちづくりワークショップ		
実施日	2022年8月6日 ～ 8月7日	会場	南陽市防災センター（沖郷公民館）
関係者数	60 人	参加者数	30人

概　要

山形県置賜地域の高校生を対象とした2日間のワークショップで、青年が高校生の自主的な地域学習を支援することを通して、高校生と地域のつながりを形成することを目的とした次世代育成事業。令和４年度は、3つの高校から計30名が参加し、高校生が自分自身の歴史を振り返る年表づくりのワークと、地域の先輩方へのインタビューで地域での生き方を学ぶことで、自分と先輩方の生き方を比較し、自分の理想の将来を考えた。

推薦団体：南陽市教育委員会社会教育課から一言

山形県南陽市にゆかりのある19～38歳の学生・社会人で構成される青年団体で、同市を拠点として地域活動に励んでいる。顕著な活動として、同県置賜地域の高校に通う高校生を対象とした標記の活動があり、高校生の地域学習の支援を通して、高校生と地域住民のつながり形成に大きく貢献した。団員各々が学業や仕事、子育てをする傍らで、地域の諸団体ならびに個人と連携し、地域のつながり形成の中核として活躍する姿は他の模範である。

審査員の講評

高校生が自分自身の歴史を振り返りつつ、地域で暮らしてきた先達の生活史を学んでいく事業プログラムがとても重要だと思いました。その過程で自身や地域の将来を考える取り組みは、単に地域振興や経済的な発展を語るだけのワークショップよりも大きな成果があったと思います。地域に根を張って生きる上の世代から学び、仲間との語り合いを通じて自分と地域の関係を振り返る姿は、地域の担い手を育ててきた青年団活動そのものです。高校生のワークショップでファシリテーターを務めた青年団は、日常の活動からそうした学習の大切さを語れる頼もしい存在でしょう。

コロナ禍を乗り越え事業をブラッシュアップして再開した粘り強さも素晴らしいし、高校生を交えた実行委員会を最後まで運営し続けるには苦労も多かったと思います。何よりこの取り組みの意義を青年団がしっかりと認識し、高校生や地域との関係を作り上げている点は、他の青年団等も参考にしてほしいと思います。

実践奨励賞

・・・長期間にわたり続けてきた活動を行っている実践や、新たな実践に取り組んだ団体などに授与されます。

新見公立大学　ヤヒロラボ（静岡県）

応募実践名	静岡県島田市川根町災害復旧支援活動		
実施日	2022年9月24日 ～ 2023年1月21日	会場	静岡県島田市川根町被災現場各所
関係者数	116人	参加者数	25人

概　要

2022 年 9 月 23 日発生の静岡県島田市川根町豪雨災害の復旧支援活動。川根は山の町のためボランティアが入らず、また、高齢化率 45.8%と半分が高齢者であるため、人手不足と頼み下手の高齢者宅の多さから復旧が遅れると予想。そこで、全国の災害支援ネットワークを利用して、ボランティアと物資等が川根に入るようにし、居住用家屋や要援護者の家庭を優先して復旧活動を行いました。また、団体本拠地の岡山県の学生メンバーで、静岡県に行くことができない者は、「遠くからでも支援できること」として募金活動を行い、被災された方々の経済的支援を目指した。

推薦団体：川根町青年団から一言

新見公立大学ヤヒロラボは、新見公立大学を中心とした大学生と市民ボランティアによって構成される任意団体のボランティア・チームです。被災直後、川根町は主要道路が寸断され、孤立状態に陥りました。支援もなく、川根町民が困っていた状況下で、ヤヒロラボが災害支援に関する人脈を駆使し、発災から1ヶ月で住民が通常の生活に戻ることができました。今も、川根町の命である川根茶の茶畑が土砂や汚泥で埋もれており、ヤヒロラボの活動は継続され、復旧作業に追われて疲労困憊状態で動けなくなった川根町民を支えてくださっています。以上より、川根町青年団はもちろん、川根町民一同、ヤヒロラボをここに推薦いたします。

審査員の講評

実践奨励賞の受賞おめでとうございます。これまで培った活動経験やネットワークを生かした、被災地域や住民に寄り添った支援活動が評価されました。偶然、メンバーが居合わせたとはいえ、発災直後から地元青年団や消防団らと復旧活動を開始し、全国の災害支援ネットワークを利用したボランティアや物資の収集などの援助活動で、これまで培ったノウハウを十分に発揮されました。また、高齢者や地域の事情に寄り添った支援は、多くの住民が励まされ、心強い存在だったことでしょう。本拠地の岡山から“遠くからでも支援できること”として実施した、著名ミュージシャンとのコラボレーションによる募金活動や、現在も継続されている川根茶の洗浄作業など、経済的にだけでなく、川根町住民が前を向いて歩んでいく糧となっていると思います。今後も多くの地域や人々を支える活動を発展させてください。

実践奨励賞

・・・長期間にわたり続けてきた活動を行っている実践や、新たな実践に取り組んだ団体などに授与されます。

高知県青年団協議会（高知県）

応募実践名	「劇団高知家青年団」の歩み	実　施　日	2022年5月29日 ～ 11月19日
会　　場	高知県内各地（高知市/土佐清水市/四万十市/いの町/土佐市 等）		
関係者数	約100人	参加者数	25人

概　要

高知県青年団協議会 55 年の節目を迎えるにあたり、高知県内各地の青年団・若者とともに「舞台発表・寸劇」に初挑戦。「人前で演じる」なかなか無い経験に戸惑いもありましたが、次第に一人一人が発信する楽しさ・皆で取組む一体感を感じることで、演者も裏方も耀き、また各地での青年団活動が弾んでいくきっかけとなる機会になりました。今こそ、青年団・社会教育。これまでとこれからを繋ぐ劇団高知家青年団の歩みです。

推薦団体：高知県青年団協議会から一言

高知県青年団協議会 55 年の節目にあたり、もう一度自分たちの活動の原点や、「青年団・社会教育」の必要性について考えた時に、先輩方が培い繋いできた思いを、令和の時代を生きる自分たちで発信したいと考え舞台発表に取り組みました。「個人の自由」「なんのためにやるのか？」高知県内でも地域団だけでは活動を維持していくことが難しい現状もある中で、県青協が音頭をとって集う場所をつくる・切磋琢磨し共に耀ける機会をつくることで、またその姿を地域の方々や OBOG のみなさんに見ていただくことで、それぞれの地域から青年団・若者が再びいきいき活動できる新しい素地ができた実践です。

審査員の講評

私たちは土佐人である。そのことに強い誇りと信念を持っていることが伝わってきました。北海道と高知県のつながりを社会教育というキーワードで掘り起こしていくことも大変良い着眼点でした。自分たちの目で、足を使って学ぶ。そうして集めた情報を元に脚本を作り、仲間を集め、劇の練習を通して参加者一人ひとりの結束力が高まっていく。地域づくりから仲間づくりへとつながっていますね。 今回のアピールレポートは、高知県青年団協議会のみなさんらしい熱意溢れる内容でしたので、毎回の取組みが大変意義深く、出会いが全てハイライトであったことがとても伝わりました。ダイジェスト動画は全編通して大変見応えがあり、随所に字幕があったのも大変良かったです。過去のつながりは現在も続いていることが、現役の青年団のみなさんも全身で感じたのではないでしょうか。県下の青年たちを巻き込む核の動きを高知県青年団協議会が果たす、優れた実践でした。これからも皆さん活動が様々な場面で見られることを楽しみにしています。

その他応募があった実践の概要と審査員講評

とちぎボランティアネットワーク（栃木県）

応募実践名	第7回サンタ de ラン&クリーン		
実施日	2022年3日 ～ 12月	会場	宇都宮市オリオンスクエア・宇都宮市内大通り
関係者数	約40人	参加者数	約300人

概　要

日本の子ども達の7人に1人が相対的貧困の状態にあると言われていて、ここ数年の新型コロナウィルスの広がりが長期化している事で、社会的・経済的に困っている世帯や子どもたちの格差が広がりつつもある。

そこで、感染予防対策をしっかり行った上で、1日サンタになり子ども達の貧困が身近な問題である事を周知、支援をする事を目的として今年も開催した。

推薦団体：日本青年団協議会から一言

日本青年団新聞（YouthPost）2022 年 5 月号の特集コーナー「青年団と SDGs」で、とちぎボランティアネットワークが取り組む「サンタ de ラン&クリーン」について取り上げた。本実践は、「貧困に苦しむ子どもたちの周知・支援」を目的としたもので、クリスマスに近い時期にサンタの恰好になり、ゴミ拾いをしながら募金を集めるというチャリティイベントであす。実施主体については、とちぎボランティアネットワークを中心に子どもを支援する団体やフードバンク、高校生・大学生ボランティア、宇都宮市内や県の青年団等も加わっており、事前イベントとして募金魚（移動型募金箱）の取り組みや地元企業との連携にも力を入れている。7 回目の開催となる本実践は、参加者・募金額ともに年々増えており、地域との連携性の高さや波及効果があります。

審査員の講評

地域の中でサンタが 300 名も集まり、動いた大規模な取り組みは、地域全体が楽しみと期待にあふれ、大変な賑わいになったことが想像できます。写真からも楽しい様子が伝わりました。

取組自体は、青年団の自主的な開催ではなく、実行委員のメンバーとして実行委員会に参加ということでした。他団体とともに活動することは、社会問題でもある貧困家庭の現状について学ぶなど、専門的な知識を持った団体との交流で得られたことは大きく、また事業を発信し仲間を集めることや、継続するための仕組みなど学ぶことが多々あったのではないかと思います。サンタに仮装し地域に賑わいを創出するだけではなく、様々な暮らしを送る家庭を知り、ともに活動に取り組む多くの仲間と出会えたこの機会を、新たなチャンスとして今度は青年団発として地域の中に新しい取り組みが生まれることも期待しています。

鯖江市連合青年団（福井県）

応募実践名	さばえオータムフェアの開催　～NEXT SABAE での活動～		
実　施　日	2021年10日10日 ～ 2022年9月19日	会　　場	鯖江市西山公園
関係者数	60 人	参加者数	約 13,000 人(2日間)

概　要

コロナ禍による影響でイベントの中止が相次ぎ、まちの活気が失われる中、「鯖江市を盛り上げるためになにかできないか」と、鯖江市内の「青年」の名が付く三団体、鯖江市連合青年団（鯖艦）、鯖江商工会議所青年部（鯖江YEG）、鯖江青年会議所（JC）が集結し「NEXTSABAE 実行委員会」を2021年12月に立ち上げ企画を進めていき、2022年9月17、18日に鯖江市の賑わいの中心である西山公園にて「さばえオータムフェア」を開催した。

推薦団体：福井県連合青年団から一言

コロナ禍による影響でイベントの中止が相次ぎ、まちの活気が失われる中、「鯖江市を盛り上げるためになにかできないか」と、鯖江市内の「青年」の名が付く三団体、鯖江市連合青年団（鯖艦）、鯖江商工会議所青年部（鯖江YEG）、鯖江青年会議所（JC）が集結し「NEXTSABAE 実行委員会」を2021年12月に立ち上げ企画を進めていき、鯖江市の賑わいの中心である西山公園にて「さばえオータムフェア」を開催したことにより、鯖江市自体を元気づけた。また、全国的にも発となる異なる方向性を持つ三団体が集まって事業を進めたことにより、各団体の強みや良さなどを再確認できる良い機会となった。他団体と連携し行っている活動であることから、横のつながりが増え、青年団の魅力をアピールできた事業であり、今後の展開も期待できる当該団体を推薦いたします。

審査員の講評

「さばえオータムフェア」は青年たちの三団体の得意分野を活かした初のイベントです。青年団、青年会議所、商工会議所青年部という、互いの活動理念や組織基盤の異なる青年団体同士が、違いを超えて協働したことに意義があり、コロナ禍での苦労を覆した鯖江市の明るい一歩となる取り組みと言えるでしょう。そこにはコロナ禍によって疲弊した“まち全体を盛り上げたい、活性化させたい”という青年たちの強い想いが伝わってきます。

そのために、長きにわたって会議を重ねて運営に協力した姿勢は素晴らしいものがあります。参加人数の多い、大規模なイベントであり、他団体と協力や繋がりから得るものが多く、今後の活動の参考になるでしょう。

ただ、具体的に青年団が担当した部分の苦労話なども知りたかったところです。また、地元メディアの記事からも読み取られるように、青年団としては「声をかけられて行った」可能性があり、自発性はどうであったのか、そこは評価の分かれるところでした。これを機に、今後もお互いの得意な面や独自性を生かし合いながら、継続していける形になることを期待しています。

CREW R.S.竜王町青年団（滋賀県）

応募実践名	小学生向けお仕事体験活動「わくわくワーク'22」		
実　施　日	2022年2月18日	会　　場	竜王町公民館
関係者数	30 人	参加者数	25人

概　要

竜王町内に住む小学生を対象とし、普段、生活する中で体験出来ない様々な職業について触れ合い挑戦する機会をつくるとともに世の中ではどのような職業があり、どのようなことを行なっているか学び、将来に繋がるきっかけとなるような場とします。

推薦団体：滋賀県青年団体連合会から一言

近年、竜王町青年団では自分の団の中での活動は継続的に行ってきたが、地域など対外向けに活動をしていくことはできていなかった。また、新入団員の獲得に苦戦し、どのようにして団を盛り上げていくか悩み続けていました。そんな中、子ども向けのイベントがしたいとの声が挙がり、新たな試みとしてこの事業をやり切ったということを県青連としては高く評価しています。また、地域にもこの活動が受け入れられ、この取り組みが続いていく未来が見えてきていることも大きな点であると思います。

新入団員の顔が多数見えた事業にもなったことも踏まえ、以上の点からこの実践を推薦いたします。

審査員の講評

地域に向けた活動をと、他地域青年団の取り組みを参考に開催した本事業は、事業を構成する際に、体験内容や衣装や備品など、試行錯誤したのが、大変楽しい時間であったのではないかと思います。

体験する職業の選定にあたっては、全ての職業に於いて本物の職業の人を集められたならば、深みと広がりが続くと感じています。

今後は、自分たちの暮らす地域には、どんな職業があって、またどんな人がいるかを知り、地域のプロの職業の方を先生として迎え連携していくことで、地域と青年の繋がりも深まりかす。この取り組みには、とても大きな可能性を感じています。

団員獲得に繋がったこともあり、地域の人への協力をより多く得ながら規模拡大も視野にいれて本物を体験できる青年団事業として、継続的な開催を期待しています。

岡山県青年団協議会（岡山県）

応募実践名	スポ GOMIin岡山		
実　施　日	2021年8月7日 ～ 2022年6月5日		
会　　場	岡山市 下石井公園 周囲 1.5km		
関係者数	16人	参加者数	66人

概　要

清掃活動の機会を通じ環境への意識を高めてもらうことを目的にスポーツ形式のゴミ拾い「スポ GOMIin岡山」を実施団体と協力して行った。新たな地域活動であったが、青年団の繋がりで他県からの参加もあり参加者同士の新たな交流も生まれた。

推薦団体：岡山県青年団協議会から一言

コロナウイルス禍で接触が避けられ、青年団でも例外ではなく地域活動ができない期間が続きました。その中でもコロナ禍でも地域活動が行えるイベントを企画しました。初めての事業で実際に活動している団体と積極的に意見交換を重ね、当日に臨みました。どのように競技のルールをわかりやすく伝えるか検討し実行委員内で意見交換し紙人形劇（ペープサート）を使い動画を作成し紹介しました。若者ならではのアイデアだと思います。事業を行ったあと地域の青年団から自分たちの地域でもできないか相談を受ける機会があり自分たちの活動が地域に繋がったきっかけとなる事業となりました。コロナ禍でもアイデアを出し地域活動に励む青年達を全国に紹介したく実践大賞に推薦いたします。

審査員の講評

社会全体で環境問題への意識が高まり、各地でこのような活動がひろがっています。青年団活動でも取り入れられていることをまずは一番に評価しました。岡山県青年団協議会のみなさんは、主体的に活動ができない中で踏み出した一歩だったと思います。コロナ禍であっても地域のための活動になるだけでなく、参加する一人ひとりが楽しめ、かつ SDGsを意識していることから、県団のみなさんの高い意識を感じました。

事業を企画するにあたり、丁寧なヒアリング調査と下見だけでなく、紙人形劇（ペープサート）YouTube 配信を通して、少しでもわかりやすく参加者に伝える工夫なども良かったです。架空とはいえ高校の名前が「青年団高校」でしたので、思わず笑みがこぼれました。動画に関して言えば、最後に実行委員の一覧などのキャストやスタッフの紹介、過去の写真なども入れることができたら、さらに動画の質が向上したと思います。

実行委員会で行うことで、活動の輪が広がり青年団のことを伝える機会にもなったと推察します。こうした実践が県内外にさらにひろがっていくことを期待しています。

教宣活動の部

実践概要　・　審査員講評

３県から６実践の応募がありました

※審査員の講評以外は、提出資料のアピールレポートや推薦書から抜粋しています。

教宣大賞

…教宣活動に取り組み、地域活動や組織活動に大きく貢献し、集められた取組みの中で集められた実践の中で最も優れた実践に取り組んだ団体に授与されます。

舞鶴町青年会（大分県）

※同会の応募作品「ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介」と併せて教宣大賞を受賞しました。

応募実践名	舞鶴町青年会新聞		
実施日	2021年3月 ～ 2023月1月	活動場所	大分市舞鶴町及びその周辺地域
関係者数	50人	参加者数	100人

概　要

舞鶴町青年会は、2015年発足の歴史が浅い組織です。認知度向上のため、活動の詳細や行事に込めた想い等を広報活動で周知することで、町内の皆さんに理解を深めていただき、また、活動の楽しさや魅力を感じていただきたいと思っています。スマホや SNS に馴染みがない世代にも見てもらいやすいように、紙ベースの広報紙発行の意義は大きいと感じています。地域社会の全ての世代へ向けた広報活動を展開することで、活動が地域全体を巻き込んだものになり、世代間交流や次世代への事業の承継にも繋がると考えます。

推薦団体：大分県連合青年団から一言

「紙と SNS の両方活用」･･･紙と SNS 両方を活用することで、各世代の住民に活動を紹介できるため。写真も多く、活動の雰囲気がよく伝わります。

「年間発行回数と部数の多さ」･･･年間5回程度発行で、各 500 部と発行の多さも光り、発行機会が多いほど活動をより多く知っていただけます。発行にあたっては、自治会協力の回覧と青年会員によるポスティングを実施。地元との信頼協力体制が築けていること、会員自身も汗を流して頑張っています。

「事前事後両方の発信」･･･事前事後両方の発信を行うことで、祭りや青年会活動への周知報告が地域に浸透しているためです。祭りや獅子巡行時、事前に巡行する経路図を機関誌で紹介し、巡行の列に地域の子どもたちも一緒に加わるなど、事前告知が奏功しています。活動の共有や記録としても継続していくことで、地域への信頼や文化の記録継承にも資するため推薦します。

審査員の講評

舞鶴町青年会新聞は定期的に発行され、地域の回覧板や会員による集合住宅へのポスト投函などで多くの部数を配布しています。統一されたシンプルでわかりやすい誌面であり、行事の事前事後報告などしっかりした内容を幅広い世代に簡潔に伝え、地元に於いて無くてはならない位置づけとなっていると感じます。その内容は転入者に多い子どもを含む家庭などを文化行事への参加に導き、地域の活性化をうながす波及効果があります。さらに地域文化の発信や大事な記録となり、青年会の活動記録としても残ります。SDGs のロゴを掲げ、地域文化の継承も含めた持続可能なまちづくり取り組む姿勢も素晴らしいです。誌面だけでなく QR コードで SNS に連携させ、内容も両方の媒体の特性を活かし各世代に向けて発信していることから、ウェブサイトも含め「教宣大賞」の受賞です。これからも仲間と協力し合い、自由な発想や行動力で広報を続けていくことを期待します。

舞鶴町青年会（大分県）

※同会の応募作品「舞鶴町青年会新聞」と併せて教宣大賞を受賞しました。

応募実践名	ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介		
実施日	2021年3月 ～ 2023月1月	活動場所	大分市舞鶴町及びその周辺地域
関係者数	50人	参加者数	100人

概　要

舞鶴町青年会は、2015（平成27）年発足の歴史が浅い組織です。認知度向上のため、活動の詳細や行事に込めた想い等を広報活動で周知することで、町内の皆さんに理解を深めていただき、また、活動の楽しさや魅力を感じていただきたいと思っています。紙ベースの広報紙発行に加え、広報誌では伝えきれない多くの情報量を盛り込み、リアルタイムでの情報発信ができる HP や SNS を活用しています。より広範囲に情報発信ができることから、交流や新しいアイデアも生まれ、活動の幅を広げることにも繋がります。

推薦団体：大分県連合青年団から一言

「便利さを活用」・・・ウェブサイトを通じて参加申込フォームや活動の進捗確認も活用し、参加者リスト管理や会員間の円滑なコミュニケーションにつながります。広報誌に QR コードも掲載し、アクセスしやすく工夫しています。

「YouTube で動く姿も紹介」・・・山車の巡幸など活動の様子を動画で紹介していることも魅力であるため。特にお祭りは、舞の動き、お囃子の調子、観客の熱気など、動きや音が人々に求められるため、魅力発信のため動画が重宝される。当日参加できなかった方々や、日本や世界各地にお届けできるのも魅力的です。

「キャラクターも活用」・・・舞鶴町青年会オフィシャルキャラクター「まいっつる君」は、愛くるしさとかっこよさ両面を備えたキャラクターは、福笑い企画で子どもたちに大好評を博した。これらを活用した取り組みを推薦します。

審査員の講評

世代間をつなぐツールとしてシンプルでわかりやすいデザインのウェブサイトです。【活動の記録】として過去の各々のイベント等の様子を写真や記事、YouTubu 等で動画を確認することができ、この町の活気や魅力がわかりやすく伝わってきます。こういった活動記録の情報を積み重ねていくことにより、誰でも過去の情報に簡単にアクセスできるアーカイブとなります。オフィシャルキャラクター「まいっつるくん」を駆使し福笑いのダウンロードができ、舞鶴町をPRする地域愛を感じさせます。長浜祭における神輿の巡幸路はスマホでいつでも何処でも確認できるなど配慮がなされ、当日には facebook でリアルタイムに巡幸場所を知らせ、写真で生の地域の人々の様子を投稿するなど SNS をうまく活用しています。そして情報量と速効性を重視するサイトは、新聞とも内容をリンクするなど使い分けができています。参加者の申込フォームなどの管理や、忙しい団員との交流もデジタルで可能にし、DX 時代の参考になる姿だと思います。受賞おめでとうございます！

準教宣大賞

・・・教宣大賞に次いで優れた実践に取り組んだ団体に授与されます。

羽咋市青年団協議会（石川県）

応募実践名	団員募集（チラシ）
実　施　日	2022年4月29日 ～ 2023年4月28日
活動場所	羽咋市合同事務所内 羽咋市青年団協議会 団室
関係者数	6名

概　要

隔週に集まろうと声はかけあっているものの、実際に集まれる団員数は 2、3 名というのが現状です。2022年は、少人数なりにできることをと思い、春の『タケノコ掘り事業』、若者層に男女の出会いに限らない交流の場を提供する『交流パーティ』、冬の定番『サンタ宅配便』の3つを主催団体として運営しました。

今後、いかに協力者を集めるかが今後事業を行う際の課題となっていると考え、団員募集のチラシを作成しました。

推薦団体：石川県青年団協議会から一言

地域の若者への青年団という存在を周知するにあたって、成人式（二十歳のつどい）という普段は地元にいない地域の青年層に対してもアプローチしています。地元に対する思いのあふれるデザインと、「自分たちが地域を作る」という思いをストレートに表現した点が優れています。また、配布するにあたって主催である自治体と良好な関係を構築した上で行っている点もチラシの内容とは別に素晴らしいと評価しています。

審査員の講評

とにかく羽咋市青年団は楽しそう。ということが、ポスターの第一印象でした。見る側の視点にたっていることがわかります。 成人式（二十歳の集い）は、県内外の成人者が集う場として旧交を温めるだけでなく、新しい出会いの場としの役割もあります。法改正により名称は変わっても、これまで青年団が成人式を手伝っていたことは変わらず、だからこそ青年団の提案に行政側も快諾したことは言うまでもありません。日常的な関わりがあるからこその取組みでした。ポスターの色調は暖色が多く、エトキには活動の内容がわかるものにしているため、どんな活動をしているのかがわかります。1 点だけお伝えすると、「団員募集」や「一緒に活動しよう」というアイキャッチ的なものがあると、もっと印象付けられたかもしれません。Instagram の QR コードの効果もありフォロワーが増えたのも良かったです。これからも積極的に更新し、フォロワーからゲスト、ゲストからメンバーになることを期待しています。これからも楽しく活動してください。

教宣奨励賞

・・・長期間にわたり続けてきた活動を行っている実践や、新たな実践に取り組んだ団体などに授与されます。

日野町連合青年会（滋賀県）

応募実践名	広報活動 機関紙「ひのせいねん」		
実施日	2022年9月24日～2023年1月21日		
活動場所	日野町連合青年会事務所、日野町内各所		
関係者数	25人	参加者数	116人

概　要

機関紙「ひのせいねん」は、数十年前の先輩方から受け継いできた伝統です。時代が変化しても、手書きで丁寧に作成するということにこだわり続けてきました。団員数の減少により一人ひとりの負担が増え、数年前より発行回数を減らしていますが、私たちの活動やどのような思いで取り組んでいるかを知ってもらうために、毎号全団員が関わり作成しています。B4 更版紙で作成しているのも新聞折込で手に取っていただきやすいように工夫しています。

推薦団体：滋賀県青年団体連合会から一言

長年にわたり、団員全員で取り組むことを大切にしてきた機関紙です。現代のように効率化を求めて、パソコンで作ることもできるところではありますが、あえて手書きにこだわり、ぬくもりを感じさせる紙面づくりをめざし努力をしています。また、見出しの内容や読み手に興味を持ってもらえるように心がけ、地域や先輩方との繋がりを意識した機関紙を定期的に発行している点を高く評価しています。

審査員の講評

教宣奨励賞おめでとうございます。記事を拝見し、担当者の名前を記載することで、単なる情報伝達ではなく書き手と読み手をつなぐツールとして「個」を大切にした取り組みであることが窺えました。あえて「手書きにこだわる理由」について、ぬくもりや伝統を大切にされているということですが、文字を書くことが極端に少なくなった現代に於いて、一文字一文字に想いを込めて「手を動かして書く選択」をすることは、先進的な取り組みでもあると考えます。AI が数秒で見事な文章を作ることができ、テキスト入力やコピペが当たり前になった時代だからこそ、美しく画一化されたものよりも人の手が加わること自体に価値があると、誰もが感じられるようになりました。もちろん読みやすく見やすいことが前提ではありますが、手書きだからこそ皆さんの存在が感じられ、届けたい想いを込めるのにふさわしいメディアとなっていると言えるのではないでしょうか。忙しい日常の中、ともすれば機関紙づくりに時間をとられること自体、負担と感じてしまう場面もあるかと思いますが、この受賞を機に皆さん自身のことばでその価値を伝えられるよう、手書きへの認識を新たにしていただけると幸いです。

その他応募があった実践の概要と審査員講評

日野町連合青年会（滋賀県）

応募実践名	町民駅伝大会 ポスター		
実施日	2022年9月1日 ～ 12月4日	活動場所	日野町連合青年会事務所、日野町内各所
関係者数	約50人	参加者数	約350人

概　要

毎年12月に青年団員・参加者・地域住民の皆さんの心をつなぐことを目的に当事業を実施しており、今回で53 回目を迎えました。3種類のコースがあり毎年順番にコースを変えて開催しています。開催にあたってはただその地域をコースとして使わせていただくのではなく、各地区の代表者の方へのお願いとお礼やランナーの気持ちを知るために実際に団員も試走すること、コースの清掃活動など、地域に出て、地域の方と接して繋がりを大切にして事業を行っています。

推薦団体：滋賀県青年団体連合会から一言

半世紀以上にわたり続く伝統事業である「町民駅伝大会」を今年度の新メンバーを交えて制作した点、写真を複数活用したり軽い色をポスターに使用し目を引くデザインにするように心がけている点、そして「町民駅伝大会」を通して青年団員・参加者・地域住民の皆さんの心をつなぐために、他事業と準備が重なる慌ただしい中でも創意工夫を凝らしてチラシ・ポスター制作に団員一丸となって取り組んでいる点を評価しています。

審査員の講評

やっとコロナを乗り越え、各地域でさまざまなイベントが動き出す中、53 回目という半世紀以上つづく歴史ある町民駅伝大会も参加者が増え、嬉しい結果につながったことは何よりでした。ポスターでは子どもたちが走っている写真が掲載されていることで、地域ぐるみで楽しむ駅伝であり、誰でもが参加可能な大会であることが印象付けられていると感じました。

ただ、ポスター・チラシともに事業名などの情報が大きく記載されているだけという印象があり、メッセージ性のある呼びかけに乏しいように感じました。また双方に共通項のある書体や写真が採用されると、全体的に連動したイメージとして認知度も高まるのではないかと思います。このイベントの特色としては、地域の老若男女が出会える貴重な機会と言えます。具体的に何を手伝って欲しいか呼びかけることで、自分にも何か手伝えることがあればと気軽に手を挙げてくれる人もいるのではないかと推察します。来年度に向けて魅力あるキャッチコピーや参加型で協力者を募る声かけなど、皆さんの新たな仲間づくりにつながるような企画に期待しています。

特　別　賞

実践概要　・　審査員講評

　地域活動の部、教宣活動の部に申し込みがあった実践のなかから、一般財団法人日本青年館、全国青年団ＯＢ会から特別賞が授与されます

※後藤文夫賞（一般財団法人日本青年館より、地域の伝統的な郷土芸能を青年が真剣にその伝承につとめ、青年団としての取組の中で意欲的である団体に授与。全国青年大会郷土芸能の部の出場団体を対象）は、第７０回記念全国青年大会郷土芸能の部が休止となりましたので、該当がありません。

※審査員の講評以外は、提出資料のアピールレポートや推薦書から抜粋しています。

田澤義鋪賞

…一般財団法人日本青年館より、明正選挙運動、地方自治、地域振興などに取り組み優れた成果をおさめた団体に授与されます。

舞鶴町青年会（大分県）

応募実践名	青年が活躍する 活力あるまちづくり		会　　場	大分市舞鶴町及びその周辺地域	
実　施　日	2015年～現在	関係者数	30 人	参加者数	50人程度

概　　要

舞鶴町は、昭和40年代に青年団が解散して以降、青年層の組織が存在しなかったが、地域が盛り上がるには、青年の活躍が必須であると考え住民有志が集結し、舞鶴町青年会を発足させた。お祭りや懇親会を中心に、年青年層が集まる機会を創出し、これにより地域にまとまりと活気を生み出すべく活動を行っている。将来的には、地域を担う人材の発掘と育成や、伝統文化の継承等、持続可能な地域社会構築をめざしている。

推薦団体：大分県連合青年団から一言

推薦ポイントは、「継続性」と「アイデア」の 2 点。一つ目の「継続性」は、SDGs の視点を大切にし、地域の文化や自治会活動を次世代にもつなぐための活動を継続している。また、住民の転出入が多く、住民同士の交流や自治体活動の継続が難しいことから、青年層が定期的に集まる機会を創出している。文化活動や懇親会を行うことで地域への愛着がわき、人々の交流も生まれる。これを機に、活動継続で地域住民の期待も湧き、青年会への応援の声もあがっている。二つ目の「アイデア」は、コロナ禍を逆手に取ったアイデアを出し、コロナウイルスに負けず元気に活動を行った点がポイント。電子媒体を取り入れ、文明の利器を活用しながら活動の幅を広げ、交流も深めているため推薦する。

審査員の講評

田澤義鋪賞の受賞おめでとうございます。人口流動の大きな地方都市部における実践という意味で、青年活動が停滞傾向にある全国の都市部の青年たちにたいして、新たなアイディア、方法を提供しうる実践として高い評価が集まりました。

コロナ禍で疲弊している地域のために、従来の手法で伝統的なお祭りができないならお賽銭を非接触型の電子決済でできるようにする。お神輿も担ぎ手の間隔をあけて巡行する。子どもたちにも子供神輿体験教室で機会を設ける。老若男女に加え、新たに転入してきた住民まで、多様な属性をもつ住民層にフィットした情報発信として、広報誌、Facebook、LINE、Instagram といったSNSも併用し、それぞれの媒体のもつ特性を生かした効果的な広報をしていく etc 伝統行事文化の継承を軸とした、活力あるまちづくりのためのこれらアイディアは、全国の青年団活動や地域振興の参考になるでしょう。

何よりもこうした取り組みの根底に、次世代育成の視点、持続可能な社会づくりや誰も取り残さない社会づくりといった SDGsの視点が置かれている点もまた素晴らしいです。今後の継続と発展を大いに期待しています。

全国青年団ＯＢ会奨励賞

…全国青年団OB会（青年団OB・OGの連絡組織）より、全国の青年団にとって励みとなるような組織の強化及び拡大に顕著な実績をあげた団体に授与されます。

もりやま青年団（滋賀県）

応募実践名	フォト映えスポット@こんにちワーク		
実　施　日	2022年11月1日	会　　場	守山市北公民館、もりやまエコパーク交流拠点施設
関係者数	29人	参加者数	延べ250人

概　　要

小学生を対象にものづくりや職業体験を行った。9 つのブースがあり、青年団の得意分野を活かしたものや、地域のおとなが主体となって行うブースを設けた。青年団は、職業を活かした看護師ブース、興味関心のあるハンドメイド雑貨やエコブースなどを行った。本物の警察官や最先端ドローン体験、地域のコーヒーショップ屋さん、地域の鉄道同好会や自動車整備屋さんにもご協力いただき、普段では簡単に体験できないことを経験する機会となった。青年団ブースでは、子どもの楽しそうな笑顔や真剣な眼差しを目の当たりにし、子どもと関わる楽しさと青年団のやりがいを改めて感じる機会となった。

推薦団体：滋賀県青年団体連合会から一言

子どもたちの職業体験事業であるもりやま青年団の「こんにちワーク」において、参加してくれた子どもや保護者の方々が一緒に楽しく撮影できるスポットを提供したいと思い、それを実現した点、団員だけでなく、地元の高校生にも準備に関わってもらい、準備の楽しさや当日に周りから褒められるなど貴重な経験を共に味わう工夫がなされている点を評価し、全国地域実践大賞　教宣活動の部に推薦します。

審査員の講評

小学生の職業体験事業とSNSの活用が非常にうまくいった事業例ではないでしょうか。記者会見用のバックパネルを模した「映えスポット」は、会場への参加者誘致に一役買っただけでなく、会場に集まった参加者自身にオンライン上で発信してもらう手法として効果が高かったと思います。広報活動の一環として非常に多くの人たちに利用され発信につながったことが評価されました。事業直前の発案のため業者発注がかなわず、団員自ら作成したことによりデザインなどにかえって手作り感と温かみを感じます。また、高校生をスタッフにもしっかり役割を持ってもらうなど、一人一人が結束して事業に取り組む工夫がされていることも、将来的な組織づくりをうまく進めている事例として、全国青年団OB会賞の対象として評価されました。

番外編

審査会終了後に行われた２０２２年度実践大賞の取り組みをご紹介いたします

教宣作品展示会

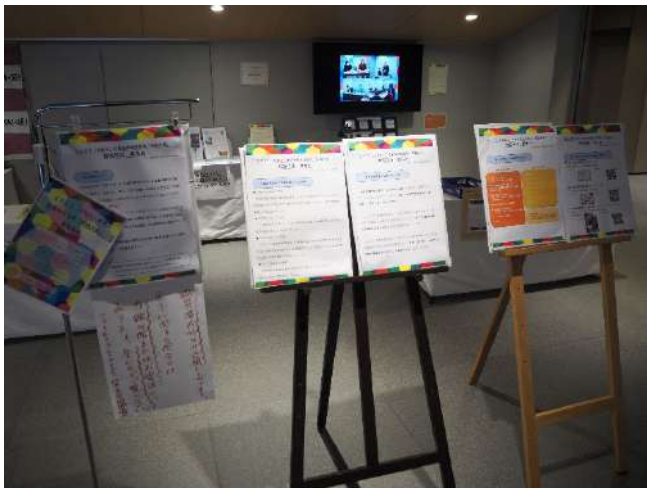
教宣作品展示会は、審査会終了後から表彰式までおよそ1か月間にわたり、日本青年館1階ギャラリースペースにて開催されました。

この試みは、全国から集約された素晴らしい実践を、日本青年館ご利用の皆様にも是非しっていただきたいという想いから始まりました。期間中は、日本青年館ホテルやレストラン、日本青年館ホールを利用するお客様や、日本スポーツ振興センター（JSC）の職員のみなさまにご覧いただきました。

概　要

名　称：2022（令和4）年度全国地域青年「実践大賞」教宣作品展示会
日　程：2023年2月～3月18日（土）　約1か月間
場　所：日本青年館1階ギャラリースペース

展示の様子



↑　実践大賞や展示会について説明するパネルを設置

←フォト映えスポット@こんにちワーク（もりやま青年団）

←舞鶴町青年会新聞を設置し、ウェブサイトをまとめた動画をモニターで放映（舞鶴町青年会）

「感想カード」の設置

展示会期間中は、観覧者のみなさんが応募者のみなさまに感想を寄せられるよう、「感想カード」を設置していました。以下は、抜粋したコメントです。

・色々な活動を知れて良かったです。自分も地元でやってみたいと思えるような内容でした。これからも頑張って続けてください。

・わが県のみんなの頑張りを作品として、見ることができてよかったです！！これからも共に頑張ります！！

・とてもすてきな活動されてますね。がんばってください。

・このような形で展示いただいてありがとうございます！！

・全てにおいて素晴らしい活動です。来年度はもっと数多くの参加を期待したいですね。

・地域に根付いて活動している若者たちの取り組みを知ることができて、励みになりました。これからの活動もますます楽しみです♪

・実践や教宣など聞き馴染みのない言葉ばかり・・・。でも全国各地の青年団が取り組んでてすごいなーと思いました。これからもがんばってください！！

表彰式

例年、主催事業である全国青年問題研究集会の参加者の前で行っていた表彰式を、今年度から日青協理事会終了後に切り替えました。これは、全国から代表して集う理事者たちに、様々な実践を知ってもらい、地元に帰って今後の活動に役立ててもらうためです。

今年は、日本青年館8階グリーンを拠点にオンラインと対面でのハイブリット開催を実現し、コロナ禍で上京が難しい方や日程的に参加が難しい方でも柔軟に対応できるような形となっています。

また、応募実践や表彰団体を紹介するオープニングムービーや、各表彰作品の概要を日青協副会長から伝えてもらい、どんな実践が表彰されたのか想像しやすい式となりました。更に、表彰者からのコメントでは、表彰された喜びや今後に向けた展望、副賞（奨励金）の使い道について笑顔で語る姿が多く見受けられました。

概　要

名　称：２０２２（令和４）年度全国地域青年「実践大賞」表彰式
日　程：２０２３年３月１８日（土）１７時１５分～１７時４５分
場　所：日本青年館８階グリーン・オンライン

出席者一覧

表彰式には、18道県27名の日青協理事者並びに22年度日青協執行部が参列した。

◆表彰者一覧

団体名	氏名	団体名	氏名
小豆島町青年団	石井寿弥	南陽青年団	松木啓人
新見公立大学ヤヒロラボ	八尋茂樹	新見公立大学ヤヒロラボ	八尋五月
高知県青年団協議会	濱口裕也	石川県青年団協議会	番匠未樹
日野町連合青年会	間瀬　克	日野町連合青年会	馬塲晃一
もりやま青年団	松井里美		

※舞鶴町青年会は欠席

当日のスケジュール

時　間	内　容
17:00～17:15	表彰団体入室
17:15～17:18	オープニング動画
17:18～17:20	2022 年度実践大賞に関する説明 日本青年団協議会 副会長 藤原 麻美
17:20～17:30	表彰 ・地域活動の部 実践大賞　小豆島町青年団 準実践大賞　南陽青年団 実践奨励賞　新見公立大学 ヤヒロラボ 実践奨励賞　高知県青年団協議会 ・教宣活動の部 教宣大賞　舞鶴町青年会 準教宣大賞　羽咋市青年団協議会 教宣奨励賞　日野町連合青年会 ・特別賞 田澤義鋪賞　舞鶴町青年会 全国青年団OB会奨励賞　もりやま青年団
17:30～17:43	表彰者から一言　※表彰順と同様
17:43～17:45	主催者あいさつ 日本青年団協議会 会長 中園 謙二
17:45	表彰式終了

表彰式の様子

↑日本青年館8階グリーンで行われた表彰式

↑主催者代表として日青協会長より表彰状の読み上げ

↑表彰者（石井団長・小豆島町青年団）より一言

雑誌「社会教育」
地域×若者＝社会教育の連載

一般財団法人日本青年館発行の雑誌「社会教育」に、1号につき1件の受賞実践をご紹介しています。2021年度からはじまったこの企画は、2023年4月号から企画名を「青年団?何をしているところ?」から改題し、読者により親しみやすく感じてもらうためタイトルを変更しました。雑誌をご購読いただいているみなさまに全国各地で地元のために奮闘する若者たちの姿を見ていただくことで、地元の若者支援や地域振興の一助となれば幸いです。

＜雑誌「社会教育」について＞

1946（昭和21）年7月、社会教育連合会（当時。のちに財団法人全日本社会教育連合会に改称後、2012（平成24）年に一般財団法人日本青年館と合併）から、月刊誌「教育と社会」として発刊。のち社会教育法の制定を期に、社会教育のいっそうの飛躍的展開を図るべく、1950（昭和25）年2月に「社会教育」誌へと改題。2021（令和3）年6月号で創刊900号を迎えた。社会教育に関する情報発信を行うとともに、不定期刊行物の編集発行や調査研究を行ってきた。各自治体教育委員会や社会教育関係者、その関係団体などを読者層の中心として、社会教育のハンドブックとして発行されている。

◆参考資料：2023年4月号　令和5年4月1日発行（922号）　92・93頁　「地域×若者＝社会教育」
2022年度全国地域青年「実践大賞」から実践大賞受賞　前編
～あんどんでつなぐ、島の未来～　小豆島町青年団（香川県）

地域×若者＝社会教育

2022年度全国地域青年「実践大賞」から
実践大賞受賞　前編

～あんどんでつなぐ、島の未来～
小豆島町青年団（香川県）

日本青年団協議会　四至本 鈴香

子どもたちがつくったあんどんには、小豆島特産品のオリーブやうどん、観光名所「重岩」が描かれている。一年中温暖な気候に恵まれた香川県小豆郡小豆島は、高松港からフェリーでおよそ1時間半かかる。瀬戸内海で二番目に大きな島には、2万8千人が暮らしている。気候と同様に住人も心のあたたかい人たちに恵まれ活動しているのは、小豆島町青年団（以下、青年団）だ。この度、栄えある実践大賞に選ばれた取組みについて、団長の石井寿弥さんと地域おこし協力隊員である大和美折さんにお話しを伺った。取材を通して見えてきたのは、今回応募のあった実践は、青年団を核とする様々なつながりから生まれた活動だった。

◆小豆島の課題

小豆島は小豆島町と土庄町の2町からなり、つくだ煮や醤油の製造、オリーブ生産などの産業が活発である。また、高松市内からも気軽に島観光に行けるため、観光業にも力を入れている。しかし、往復3時間程度の距離は、島内に宿泊することが少なく、夜のにぎわいが少ないという課題が浮き彫りになった。そうした中、団員たちは、2014年から東京・浅草ではじまった夏詣の存在を知り、地元でも始めてみようということになった。夏詣は、初詣から六カ月、同じく罪穢れを祓い清める「夏越しの大祓」を経て、過ぎし上半期の無事を感謝し、来る下半期の更なる平穏を願う催事として、近年全国各地に広がりを見せている新たな文化だ。そこで、小豆島町でも地元を盛り上げるため、夏に神社に人に来てもらうための新しい取り組みとして始めることにした。夏詣実施にあたり、派生し始まったのが今年度実践大賞に選ばれたあんどんまつりだった。

子どもたちがつくったあんどんには、小豆島特産品のオリーブやうどん、観光名所「重岩」が描かれている

◆新たな文化をつくる

昼間は賑やかでも、夜は静かな小豆島。そんな夜を明るくするだけでなく、地元の子どもたちにも活躍の場、地域での出番を提供したいという考えもあった。もともと、大和さんから「浅草・東京では、冬に神社を訪れる人（＝初詣）は多くいるけれど、夏は人がなかなか集まらないため、新しい文化として夏詣を始めた」と島の課題解決につながりそうな話を聞いていた。新たな夏の風物詩として、全国に広がりはじめた夏詣。小豆島を活気づける機会につながるように島内の町が結束し、二つの神社を中心に行うこととなった。しかし、新たな試みであったため、団員のなかには抵抗感を覚えた者もいた。

だが、実際にあった事例を参考にしていること、団のなかでも積極的に活動に参加している団員たちで企画を練ることで、想像がつきにくい新しいことでも取り組めるよう考えた。企画の骨格を作成して団員に提案してみたところ、思惑はあたり、すぐに受け入れ、団全体が企画実現のため前向きに動き始めることができたのだ。

◆地元と世界をつなげる

夏詣向い動き始めた青年団員の目に映ったのは、コロナ禍で自粛生活を強いられてきた子どもたちの顔だ。地元で活躍できるお祭りや運動会など、子どもたちの発表の場が失われてしまっていたことも、どうにか解決できないか。新たな課題に直面する団員と大和さんは毎週のように集まり、ウィズコロナでもできる子どもたちの活躍の場を考えあぐねた。屋外で密集しないということ、そして観光客相手に手薄であった夜間を利用するあんどんまつりが良いのではないかと導き出したのだ。地球上の「誰一人取り残さない」ために掲げたSDGsも達成目標までのこり8年を切っている。島民も何か取り組めるのではと考えれば、生活ごみとなってしまう牛乳パックをリサイクルし、海に囲まれ、都心よりさらに暗い島内を明かりで照らそうと思いついたのだった。子どもたちをうまく巻き込むため町職員として働く大和さんから教育委員会を経由し、小学校への依頼も快諾してもらうことになった。学校・学年ごとに仕分けされている作品に、団員たちが一枚ずつ丁寧に穴に紐を通しあんどんを製作していくうまく物事が進んだものの、せっかく子どもたちが書いてくれるのだからと、もっと良いあんどんができるように試行錯誤はまだまだつづく。牛乳パックに描かれた絵がきれいに浮かび上がるためにはどうしたものかと実験が始まった。毎日のように大和さんや団員たちは仕事終わりに集まり、牛乳パックの絵柄がついている部分をはがしてみるなど、試行錯誤を繰り返した。折り方を変えたらいいのか、描くものはマッキーがいいのかクレヨンがいいのか。インターネットの情報を駆使し、実際に団員たちであんどんを何度も製作した。子どもたちが好きなものを描いてもらい、子どもたちの個性きらめくものをつくってほしい。その一心でみんなで奔走する日々だった。

学校・学年ごとに仕分けされている作品に、団員たちが一枚ずつ丁寧に穴に紐を通しあんどんを製作していく

石井団長は「子どもたちの自由な発想で包まれたあんどんをを見たときに、夜な夜な青年団と集まってトライ&エラーを繰り返してよかったなと思います」と語る。地元に住み続けている青年団員だからこそ、気づき実行できる実践である。

後編は次号へつづく

連載：地域×若者＝社会教育

2023-4　社会教育―92

93―社会教育　2023-4

雑誌「社会教育」連載　　「地域×若者＝社会教育」　（予定）

社会教育発行月号	実践大賞年度	賞	地域	実践名（団体名）	備考
2023.4	2022	実践大賞	香川県	～小豆島あんどんまつり～SDGsのヒカリでミライをともそう～（小豆島町青年団）	大賞は２号にわたって連載
2023.5		実践大賞	香川県	～小豆島あんどんまつり～SDGsのヒカリでミライをともそう～（小豆島町青年団）	大賞は２号にわたって連載
2023.6		準実践大賞	山形県	令和４年度置賜地区高校生まちづくりワークショップ（南陽青年団）	
2023.7		実践奨励賞	静岡県	静岡県島田市川根町災害復旧支援活動（新見公立大学ヤヒロラボ）	
2023.8		実践奨励賞	高知県	「劇団高知家青年団」の歩み（高知県青年団協議会）	
2023.9		田澤義鋪賞	大分県	青年が活躍する活力あるまちづくり（舞鶴町青年会）	
2023.10		全国青年団OB会奨励賞	滋賀県	フォト映えスポット＠こんにちワーク（もりやま青年団）	
2023.11				実践大賞の意義と告知	
2023.12		教宣大賞	大分県	舞鶴町青年会新聞・ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介（舞鶴町青年会）	大賞は２号にわたって連載
2024.1		教宣大賞	大分県	舞鶴町青年会新聞・ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介（舞鶴町青年会）	大賞は２号にわたって連載
2024.2		準教宣大賞	石川県	団員募集チラシ（羽咋市青年団協議会）	
2024.3		教宣奨励賞	滋賀県	広報活動機関紙「ひのせいねん」（日野町連合青年会）	

＜資料集について＞

表彰団体の実践をより多くの方々に知っていただき、この資料を通じて良いと思ったことを取り入れ、そして地元での実践につなげていくための資料集です。

お申し込みの際、応募団体からご提出いただきましたアピールレポートを掲載しております。本紙掲載の都合上、実際の書類形式とは異なる部分がございますが、文章についてはそのまま記載しております。

実践大賞　受賞

小豆島町青年団（香川県）

～小豆島あんどんまつり～
SDGs のヒカリでミライをともそう～

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・設問有り）

応募団体名	（ふりがな）　しょうどしまちょうせいねんだん 小豆島町青年団	応募部門	✓　地域活動の部 □　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　しょうどしまあんどんまつりえすでぃじーずのひかりでみらいをともそう ～小豆島あんどんまつり～SDGs のヒカリでミライをともそう～		
活動実施日	２０２２年　6月　30日　～　２０２２年　7月　16日		
活動場所	土庄八幡神社　内海八幡神社		
関係者数	50人	参加者数	100人
活動概要	（200字程度）　小豆島と豊島の小学生たちがつくった、“SDGs あんどん” には、 島にまつわる絵やメッセージが描かれています。 あたたかいヒカリが「小豆島と豊島」のミライを灯します。		

活動期間　※準備から活動終了までの打ち合わせやリハーサルなど活動を行った年月を時系列で記入してください。

年	月	活動内容（各別にまとめて記入）
2022	4	企画案作り開始
		スケジュールの作成
	5	島内の小学校担当課へあんどん作成依頼
		多くの人に取り組みを知ってもらえるようＰＲの作成も開始
		小学校の各クラスへの制作物配布の袋詰め
	6	事業に向けて商工会や他団体の会員たちと打ち合わせを重ね、準備を行う
		商工会や役場などの関係団体へ協賛、後援依頼
		飾り付けように紐を取り付け
	7	土庄八幡神社あんどん取り付け
		土庄八幡神社あんどん片付け
		内海八幡神社あんどん取り付け
		内海八幡神社あんどん片付け
		以上

＜アピールポイント＞

①活動の詳細を以下に自由に記載してください。文字だけでなく、写真など取り組みの様子や活動の風景なども入れても問題ありません。
②文字の大きさやレイアウトに指定はありません。
③「いつ、誰が、どこで、どのように、何をした、その理由は？」の５Ｗ１Ｈがわかるように、できるだけ具体的に書くことを心がけてください。

■活動のきっかけ、準備期間に関すること等

現在も猛威を振るう新型コロナウイルスの影響の中で自由に外へ出られない子供たちに何か楽しめるようなイベント、集まれる場所を提供したいと考え地域おこし協力隊の方と一緒になって企画をしました。ただ作ったものを見に来るのではなく制作過程で作成テーマを小豆島にし、郷土愛をはぐくむ事が出来ればと思い子供たちが記憶に残る小豆島を描いてもらおうと企画しました。

■活動中の苦労、印象深かったこと等

島内には6校の小学校がありますが各クラス分けをしたあんどんの管理や保存は大変でした。イベント開催までも時間が足りず集まる時間も増やしたりと団員をはじめ関係者の方々にとっても非常に大変な期間だったと思います。また、昨年挙行した夏詣とも合わせたイベントだったので両方の準備で慌ただしかったです。それでもあんどんを回収し一人一人の作品を見ていると様々な小豆島のいいところを描いてくれていてとても感動したことがとても印象に残っています。

■活動の成果、今後の展望に関すること等

今までの行ってきた事業の中で規模が大きかったのもあり団員一人一人のスキルアップが図れたと思います。また、開催した神社への参拝者も増えており一つの成功を収めることができました。見に来てくれた子供たちが自分の作品を探しお友達と作品について語り合う姿を見れたことが何よりの成功だと思います。今後も継続的に行っていく予定なので大人の方にも飾っていただくなど参加者の規模も大きくしていきたいです。

■地元の人たち（参加者）の反応

参加された方からはなかなか外でイベントもない中子供とこれるイベントがあってよかったといい評価のおこえを多数いただきましたまた地元にすまれている方からもライトアップされたあんどんを見ていると落ち着くと感想もいただけたり好感触なイベントとして終えることができました。

■自由記述欄（各欄で記載できなかったこと等）

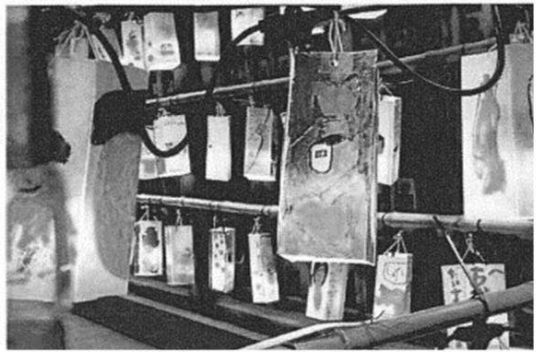
コロナ禍で制限もある中無事に終えられたことはよかったと思うのでこの経験を次の事業などにも繋げたいです。

以　上

＜参考資料＞

2022年11月に開催されました第70回記念全国青年大会写真展で優秀賞を受賞した、小豆島町青年団石井寿弥団長の作品（組版写真）です。

今回、実践大賞を受賞した「あんどんまつり」を撮影したこちらの写真は、写真展審査員からは「難しい撮影（暗闇で動きが少ないため）にも関わらず、時間をかけた丁寧な表現」と高く評価されています。



準実践大賞　受賞

南陽青年団（山形県）

令和４年度置賜地区
高校生まちづくりワークショップ

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・設問有り）

応募団体名	（ふりがな）　なんようせいねんだん 南陽青年団	応募部門	☑　地域活動の部 □　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　れいわ４ねんどおきたまちくこうこうせいまちづくりわーくしょっぷ 令和４年度置賜地区高校生まちづくりワークショップ		
活動実施日	2022年　8月　6日　～　2022年　8月　7日		
活動場所	南陽市防災センター（沖郷公民館）		
関係者数	約60名	参加者数	30名
活動概要	（200字程度）山形県置賜地域の高校生を対象とした２日間のワークショップで、青年が高校生の自主的な地域学習を支援することを通して、高校生と地域のつながりを形成することを目的とした次世代育成事業。令和4年度は、３つの高校から計３０名が参加し、高校生が自分自身の歴史を振り返る年表づくりのワークと、地域の先輩方へのインタビューで地域での生き方を学ぶことで、自分と先輩方の生き方を比較し、自分の理想の将来を考えた。		

活動期間　※準備から活動終了までの打ち合わせやリハーサルなど活動を行った年月を時系列で記入してください。

年	月	活動内容（各別にまとめて記入）
令和２年	8月	南陽市教育委員会社会教育課との共催で、同名事業を実施。高校生の
		グループ単位での活動におけるグループファシリテーターとして参画。
令和３年	3月	定例会で、同事業を青年団主体でリニューアルして開催することを決定。
	8月	新型コロナウイルス感染拡大により開催を見送り、代わりに高校生との
		対話を通じて、次年度の開催のヒントを得るためのオンラインセミナー
		を開催。
令和4年	1月	開催に向けた打合せ実施。市内唯一の高校である南陽高校も交え、共催
		する市社会教育課との三者で方向性を確認。青年団の発案で、企画運営
		を行う実行委員会に、南陽高校生の有志を加えることとなる。
		青年団内でも、企画の中心を担う実行委員8名を選抜。
令和4年	4月	南陽高校生に対し実行委員募集を呼びかけ、8名の高校生が加入。
	5月	団員8名と高校生8名の計16名で実行委員会としての活動がスタート。
		対面、オンライン会議を使い分けながら企画を練った。5～8月までの間
		にプログラムデザイン講座１回、実行委員会7回、青年団員の打合せ６回
		を実施。並行して、団員のコネクションを活用しながらインタビューを
		受けてくれる地域の方々への交渉も行った。
	8月	8/6.7の2日間で事業を開催。3つの高校から計30名の生徒が参加。
		当日運営に参加した団員は14名。インタビュイーとして参加した地域の
		方は7名。

＜アピールポイント＞

■活動のきっかけ、事業をつくるうえで参考にしたこと、準備期間に関すること等

きっかけは令和2年に始まったコロナ禍で、高校生の活動や経験の場が失われたこと。地元の後輩のためにできることをしたいという思いが生まれ、「高校生が地域を学び、まちづくりを考える事業」を市社会教育課と企画した。弊団は、高校生の学びを支援するファシリテーターとして参画することとなった。令和2年度の事業に参加する中で、高校生の学びを支援することのやりがい・楽しさを感じ、次年度も青年団主体の事業としてブラッシュアップして開催することを決定した。（令和３年度はコロナの影響で開催見送り。）令和4年度の事業企画にあたっては、高校生に寄り添ったプログラムにするため、令和2年度の参加者と、現役高校生（実行委員）の意見を積極的に取り入れた。また、一般社団法人とちぎ市民協働研究会代表理事の廣瀬隆人氏を講師に招き「プログラムデザイン講座」も開催。丸一日公民館に缶詰となって、団員自身が企画作りの手法を学び、高校生の学びを深めるためのプログラムを構築していった。
実行委員会に高校生を加えて、長期間にわたる企画・準備を共にしたことには、「青年団という大人たちが地域でどう生きているか」を高校生に間近で見てもらいたいというねらいがあった。

↑青年団と高校生実行委員を対象としたプログラムデザイン講座の様子

■活動中の苦労、印象深かったこと等

実行委員の中で会議や準備会の参加率にバラつきがあり、実行委員長をはじめごく一部の団員に負担が偏ることが最初の課題だった。ＬＩＮＥを介したやり取りでは、実行委員や一般団員に中心メンバーの「思い」までは伝わりにくく、団員全体のモチベーションを合わせることに注力する時間は苦しかった。それを乗り越えた後も、参加する高校生に青年団の「思い」を伝えるにはどんな方法（プログラム）が良いか、模造紙を囲んで頭を悩ませた。高校生の学びを支援することへの責任を感じながらも、お世話になっている廣瀬先生をはじめとするメンターから助言をもらいながら、何とかアイデアを形にすることができた。準備期間こそ苦しかったが、当日を迎え高校生を前にするとアドレナリンが出て、団員一人一人が個性や特技、意見を出し合い実施することができた。2日目の最後に高校生一人一人から感想を聞けたときの達成感はひとしおだった。

↑本番の様子。高校生の年表づくりワークをサポートする青年（紫のポロシャツ）

■活動の成果、今後の展望に関すること等

まず、主催団体として責任を持って企画運営を成し遂げられたことが1つの成果である。準備期間中、団員同士が共に悩み、２日間を無事に終えたときの達成感や感動を共有できたことで団結力が高まった。また、高校生をファシリテートする経験を通して、青年自身の学びと成長につながったことも大きな成果である。さらに、令和２年度とは異なるテイストで実施できたことで、ノウハウの幅が広がり、次回の開催への課題と新たなアイデアも見えてきている。人に説明する力を身に付けるなどの団員個人の反省や、プログラムを改良するなどの全体的な反省を活かしつつ、高校生が地域のつながりを肌で感じ、そのつながりをさらに広げていけるようなワークショップにしていきたい。また、青年団が地域のつながりの核となれるよう、実績を積み、信頼を獲得していきたい。

南陽青年団が事業後に投稿したインスタグラムもご覧ください←

2022年8月14日にシェアされた投稿
作成者: CITY.NANYO_YOUTH

■地元の人たち（参加者）の反応

参加した高校生30名に対して事前・事後アンケートの回答を求めたところ、事後アンケートの「ワークショップの満足度」については、5点満点での平均が4.72点という高得点であった。また、「都会と比べ地元（置賜地域）にはどれくらい魅力があると思いますか？」という事前・事後共通の質問については、それぞれの回答を比較した結果、事前では【すごくある８：まあ、ある１２：少ない７】であったのに対し、事後では【すごくある16：まあ、ある８：少ない５】となり、2日間のプログラムを経験したことで、地域の魅力に気づく人が増えたことが分かる。感想では「他の人の人生に触れて刺激を受けた」、「地域の人にインタビューして、沢山のつながりがあって自分があると気付いた」、「今までは自分の将来が不安だったり、この進路で本当にいいのかと思ったりしていたけど、地域の方の話を聞いて、迷いながらも自分のやりたいことを追及することが大切だと分かった」などの肯定的な回答が多かった。否定的な回答としては「人見知りなので自己紹介や一人一人発表するのが嫌だった」などがあった。

■自由記述欄（各欄で記載できなかったこと等）

前述の通り、令和4年1月から8月までの間に何度も打合せを重ねた末にワークショップを開催しており、個人で作業した時間も合わせれば、実行委員は100時間を優に超える時間を費やしている。その間モチベーションを維持することができたのは、次世代育成の使命感があったからというよりも、青年団・高校生と集まることや、地域の方々と関わることが楽しかったからと言える。「楽しいからこそ頑張れる」というのが信条である。2日間のワークショップで30名の高校生と7名のインタビューと過ごした時間は新鮮で刺激的なものだった。高校生8名を含む16名の実行委員と過ごした濃密な8ヶ月間は何にも代えがたい経験となった。高校生実行委員とは事業後も連絡を取り合う仲になり、青年団の別事業に協力してもらうなど、つながりを保ち続けている。高校卒業後も緩く繋がり続けながら、見守っていきたいと考えている。

以　上

2022年（令和4年）8月7日（日曜日）

未来の自分、年表作り

置賜の3校30人がワークショップ

南陽

置賜地区の高校生たちが、地域のためにできることについて考える「まちづくりワークショップ」が6日、南陽市の沖郷公民館で始まった。2日間の日程で、仲間や地域の大人と話し合いながら自分の年表を作成し、将来の可能性の拡大を図る。

若者目線で地域活性化を目指す「南陽青年団」（小田朝暉（ともき）団長）が主催した。多くの人との交流を通して地域のつながりの大切さに気付いてもらい、将来のリーダーを育成することを狙いとしており、南陽、米沢興譲館、米沢東の各高校の生徒計30人が参加した。

初日は五つのグループに分かれ、これまでの人生を振り返る年表を作成。青年団員からアドバイスを受けながら、メンバー同士の年表を見比べて質問や意見を出し合うなどして交流を深めていた。最終日の7日は、地元の大人たちへのインタビューを実施した上で、自分が思い描く未来の年表作りに取り組むことにしている。（菊地健介）

グループメンバーの年表を見ながら、質問や意見を出し合う高校生たち　＝南陽市・沖郷公民館

実践奨励賞　受賞

新見公立大学　ヤヒロラボ

（静岡県）

静岡県島田市川根町災害復旧支援活動

※アピールレポートについて、「自由記述」と「設問あり」の両方をご提出いただきましたので、どちらも掲載しております。

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・自由記述）

応募団体名	（ふりがな）　にいみこうりつだいがく　やひろらぼ 新見公立大学　ヤヒロラボ	応募部門	■　地域活動の部 □　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　しずおかけんしまだしかわねちょうさいがいふっきゅうしえんかつどう 静岡県島田市川根町災害復旧支援活動		
活動実施日	2022年　9月　24日　～　2022年　1月　21日		
活動場所	静岡県島田市川根町被災現場各所		
関係者数	25人	参加者数	116人
活動概要	（200字程度） 2022年9月23日発生の静岡県島田市川根町豪雨災害の復旧支援活動。川根は山の町のためボランティアが入らず、また、高齢化率45.8%と半分が高齢者であるため、人手不足と頼み下手の高齢者宅の多さから復旧が遅れると予想。そこで、2011年以来災害支援活動を実践してきた災害支援チームのヤヒロラボは川根町での復旧活動に取り組んだ。全国の災害支援ネットワークを利用して、ボランティアと物資等が川根に入るようにし、居住用家屋や要援護者の家庭を優先して復旧活動を行い、2週間程度でほぼ全て終えた。また、団体の本拠地の岡山県の学生メンバーで、静岡県に行くことができない者は、「遠くからでも支援できること」として、募金活動を行い、被災された方々の経済的支援の一助になることを目指した。		

活動報告

私たち新見公立大学ヤヒロラボは、2011年の東日本大震災での支援活動以降、11年間、全国18の被災地で学生と市民ボランティアが力を合わせて災害支援活動をしてきました。この活動は、実質的な社会貢献と、自らの成長を促すことを目指しています。そして、これまでの活動経験が、今回の川根町での災害支援活動の備えとなりました。

2022年9月に静岡県島田市川根町で豪雨災害が発生した際、ヤヒロラボのメンバーのひとりが偶然川根町に帰省していたため、被災しました。その関係で、発災直後に川根町消防団と青年団から復旧活動の方法等に関する相談を受け、そのまま川根町の復旧活動を行うと同時に、川根町有志たちの復旧活動の援助をすることになりました（図１および２）。

災害は非常に不幸なことで、被災者の心情は辛く、復旧作業は過酷です。しかし、住民たちが共助の思いで困っている人たちの支援をすることによって、それまでは名前も知らなかったり、近所関係が希薄であったりした状態が、心の結びつきが強くなり、被災前よりも仲良くなったりします。川根町も、町全体に今までにない一体感が出たと、地元住民の多くが口にしました。日頃から防災・減災に努めていても被災することは避けられないかもしれません。ですから、運悪く被災してしまった場合は、沈み込むだけで終わらず、逆にそのピンチを乗り越えて災害前よりも良い町へと変革させていくチャンスにもすることができると、住民が腹をくくることができるよう、方向付けを一緒に行っていく役割が重要だと確認できました。そして、これは南海トラフ地震前の学習にもなりました。

また、小学校の汚砂の除去を小学校校長はじめ教職員の方々や、ＰＴＡ有志のみなさんと一緒に取り組みました（図３）。また、小学校（図４）と中学校（図５）の授業で、児童・生徒に対して災害支援についての話をする機会を与えていただき、子どもたちと情報を共有したり、災害について話し合うきっかけをいただきました。

また、今回、断水地区に市が２リットルサイズの飲料水を届けたと耳にしました。かつて、高齢者には２リットルは重すぎて敬遠し、結局、その飲料水を使わずに脱水症状になったと聴いたことがあります。よって、ヤヒロラボでは、その後、500ミリリットルに絞って飲料水の寄付をしました。住民の方々は「これこれ！こういうのが欲しかったの」と予想通りとても喜んでくださいました。（図６）
結果、川根町では「新見（にいみ）」や「ヤヒロラボ」などと聞きなれないはずの単語を口にする人が増えていき、町で過ごしている私たちの姿を「ありがとう」とわざわざお礼を言いに来てくださるなど、私たちの存在を受け入れてくださり、お互いに心を通わせることができました。
ヤヒロラボの活動本拠地は岡山県新見市の大学で、授業や実習がある学生メンバーの多くが、600キロ離れた川根町へ支援に行くことが不可能でした。しかし、ヤヒロラボでは、「遠いから何もできない」と諦めるのではなく、「遠くてもできることを探し、無関心でいないようにする」という信条から、募金活動などに取り組みました。同時に、より多くの募金を寄付していただくために、有名なミュージシャンとのコラボグッズを返礼品とし、学生メンバーが岡山県から発送作業を行いました。実は寄付する側も同じで、静岡県から遠い人たちは、様々な事情から支援活動には行けないことで心が悶々としますが、そのような方々の心の受け皿としての募金活動にもなり、私たちが感謝している寄付者のみなさんから、逆に感謝されることも多々あり、活動の励みになりました。
現在も活動は継続しており、川根町の命でもある、川根茶の洗浄作業を行っています（図６）。

図１

図２

図３

図４

図５

図6

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・設問有り）

応募団体名	（ふりがな）　にいみこうりつだいがく　やひろらぼ 新見公立大学　ヤヒロラボ	応募部門	■　地域活動の部 □　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　しずおかけんしまだしかわねちょうさいがいふっきゅうしえんかつどう 静岡県島田市川根町災害復旧支援活動		
活動実施日	2022年　9月　24日　～　2022年　1月　21日		
活動場所	静岡県島田市川根町被災現場各所		
関係者数	25人	参加者数	116人
活動概要	2022年9月23日発生の静岡県島田市川根町豪雨災害の復旧支援活動。川根は山の町のためボランティアが入らず、また、高齢化率45.8%と半分が高齢者であるため、人手不足と頼み下手の高齢者宅の多さから復旧が遅れると予想。そこで、2011年以来災害支援活動を実践してきた災害支援チームのヤヒロラボは川根町での復旧活動に取り組んだ。全国の災害支援ネットワークを利用して、ボランティアと物資等が川根に入るようにし、居住用家屋や要援護者の家庭を優先して復旧活動を行い、2週間程度でほぼ全て終えた。また、団体の本拠地の岡山県の学生メンバーで、静岡県に行くことができない者は、「遠くからでも支援できること」として、募金活動を行い、被災された方々の経済的支援の一助になることを目指した。		

活動期間　※準備から活動終了までの打ち合わせやリハーサルなど活動を行った年月を時系列で記入してください。

年	月	活動内容（各別にまとめて記入）
活動内容抜粋		発災当日、川根町民からＳＯＳの連絡が入る（9/23）。
2022	9	翌日現地入りし、被災した家庭の調査開始（9/24）。
		川根町青年団と、家屋や店舗、工場に流入した土砂や汚泥を除去開始。（9/24～10/5）
		水害でレジオネラ菌吸引で病気になるため、防塵マスクをボランティアに配布（9/25～）。
		川根小校庭が汚泥で埋まり、児童が汚砂を吸って病気にならぬよう校長と打ち合わせ（9/26）。
		川根小学校長の呼びかけで、ＰＴＡと一緒に校庭の泥を除去（9/28）。
		災害支援プロジェクト#サポウィズに寄付要請し、土嚢袋５千枚、ゲルピャー２台、発電機２台を入手、軽ダンプをレンタル（9/28）。
		土砂埋没家屋の救出のため、一社OPEN JAPANに重機での土砂撤去を要請、復旧（9/29）。
		頼み下手から支援を受けていない家庭の調査のため、青年団とローラー作戦開始（9/30）。
	10	被災家庭の浸水で塗れた畳を上げ、床剥がし、床下の泥の撤去開始（10/1～10/10）。
		国会議員および市長それぞれの視察のアテンドを行う（10/2）。
		災害支援団体リユースエイドテック（ＲＡＴ）と協働開始（10/4）
		団体の本拠地の岡山県で、募金活動を展開。その返礼品として、人気ロックバンド・ELLEGARDENの高橋宏貴とのコラボグッズを２つ制作（10/4）
		土砂で埋まった側溝の土砂撤去を開始（10/11～12/25）
		社協主催水害被害相談会に、被災家庭２軒を引率（10/29）。
		川根町民会議にて情報共有のため災害支援活動について報告（10/19）
	11	川根町婦人会より、一輪車電動化キットの寄付を受ける（11/20）。
		NPO法人幡ヶ谷再生大学復興支援部（幡再）と協働開始（11/15）。
		断水地区に供給する飲料水700本を断水に苦しむ７軒に寄付（11/17）。
		川根中学校の探求学習で災害支援に関する授業のゲスト講師（11/21）。
		被災した川根茶の茶畑の復旧活動開始（11/26～現在）。
		川根小学校の総合的な学習で災害支援に関する授業のゲスト講師（11/29）。
	12	社協主催災害個別相談会に、被災家庭３軒を引率（12/12）。
		災害復興祈願の川根町イルミネーション点灯式セレモニーで、駄菓子屋模擬店を展開（12/24）。

＜アピールポイント＞

■活動のきっかけ、事業をつくるうえで参考にしたこと、準備期間に関すること等

私たち新見公立大学ヤヒロラボは、2011年の東日本大震災での支援活動以降、11年間、全国18の被災地で学生と市民ボランティアが力を合わせて災害支援活動をしてきました。この活動は、実質的な社会貢献と、自らの成長を促すことを目指しています。そして、これまでの活動経験が、今回の川根町での災害支援活動の備えとなりました。
2022年9月に静岡県島田市川根町で豪雨災害が発生した際、ヤヒロラボのメンバーのひとりが偶然川根町に帰省していたため、被災しました。その関係で、発災直後に川根町消防団と青年団から復旧活動の方法等に関する相談を受け、そのまま川根町の復旧活動を行うと同時に、川根町有志たちの復旧活動の援助をすることになりました。

■活動中の苦労、印象深かったこと等

災害が起こることは避けられません。しかし、それに備えた議論があまりなされてこなかったことが今回の川根の災害復旧でもやはり問題化しました。例えば、大量の災害ゴミを置く場所を市が決めていなかったため、急に決められた場所が、住民の思い出（思い入れ）がとても深い場所でした。よく通る道沿いに積みあがった災害ゴミは視覚的に住民の心をむしばんでいき、それは二次被害と言えました。ヤヒロラボでは、傾聴ボランティアも行っており、心の負担に耐えられなくなりそうな住民を社会福祉協議会や医療機関に繋ぐこともしました。（図１）

■活動の成果、今後の展望に関すること等

災害は非常に不幸なことで、被災者の心情は辛く、復旧作業は過酷です。しかし、住民たちが共助の思いで困っている人たちの支援をすることによって、それまでは名前も知らなかったり、近所関係が希薄であったりした状態が、心の結びつきが強くなり、被災前よりも仲良くなったりします。川根町も、町全体に今までにない一体感が出たと、地元住民の多くが口にしました。日頃から防災・減災に努めていても被災することは避けられないかもしれません。ですから、運悪く被災してしまった場合は、沈み込むだけで終わらず、逆にそのピンチを乗り越えて災害前よりも良い町へと変革させていくチャンスにもすることができると、住民が腹をくくることができるよう、方向付けを一緒に行っていく役割が重要だと確認できました。そして、これは南海トラフ地震前の学習にもなりました。

■地元の人たち（参加者）の反応

これまでの活動経験を活かし、民家や田畑、教育機関などへの支援方法を地元有志と共有し、短期間で復旧を完了することを目指しました。また、例えば、今回、断水地区に市が２リットルサイズの飲料水を届けたと耳にしました。かつて、高齢者には２リットルは重すぎて敬遠し、結局、その飲料水を使わずに脱水症状になったと聴いたことがあります。よって、ヤヒロラボでは、その後、500ミリリットルに絞って飲料水の寄付をしました。住民の方々は「これこれ！こういうのが欲しかったの」と予想通りとても喜んでくださいました。
結果、川根町では「新見（にいみ）」や「ヤヒロラボ」などと聞きなれないはずの単語を口にする人が増えていき、町で過ごしている私たちの姿を「ありがとう」とわざわざお礼を言いに来てくださるなど、私たちの存在を受け入れてくださり、お互いに心を通わせることができました（図２）。

■自由記述欄（各欄で記載できなかったこと等）

ヤヒロラボの活動本拠地は岡山県新見市の大学で、授業や実習がある学生メンバーの多くが、600キロ離れた川根町へ支援に行くことが不可能でした。しかし、ヤヒロラボでは、「遠いから何もできない」と諦めるのではなく、「遠くてもできることを探し、無関心でいないようにする」という信条から、募金活動などに取り組みました。同時に、より多くの募金を寄付していただくために、有名なミュージシャンとのコラボグッズを返礼品とし（図３）、学生メンバーが岡山県から発送作業を行いました。実は寄付する側も同じで、静岡県から遠い人たちは、様々な事情から支援活動には行けないことで心が悶々としますが、そのような方々の心の受け皿としての募金活動にもなり、私たちが感謝している寄付者のみなさんから、逆に感謝されることも多々あり、活動の励みになりました（図３および４）。

以　上

図１　目に触れる災害ゴミによる２次災害

図２　住民の方々からの評価

図３　有名ミュージシャンとのコラボ募金活動

図４　離れていてもできる支援活動を模索する

実践奨励賞　受賞

高知県青年団協議会

（高知県）

「劇団高知家青年団」の歩み

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・自由記述）

応募団体名	（ふりがな）　こうちけんせいねんだんきょうぎかい 高知県青年団協議会	応募部門	■　地域活動の部 □　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　げきだんこうちけせいねんだんのあゆみ 「劇団高知家青年団」の歩み		
活動実施日	2022年　5月　29日　～　2022年　11月　19日		
活動場所	高知県内各地（高知市/土佐清水市/四万十市/いの町/土佐市　等）		
関係者数	約100人	参加者数	25名
活動概要	（200字程度） 高知県青年団協議会55年の節目を迎えるにあたり、高知県内各地の青年団・若者とともに「舞台発表・寸劇」に初挑戦。「人前で演じる」なかなか無い経験に戸惑いもありましたが、次第に一人一人が発信する楽しさ・皆で取組む一体感を感じることで、演者も裏方も耀き、また各地での青年団活動が弾んでいくきっかけとなる機会になりました。今こそ、青年団・社会教育。これまでとこれからを繋ぐ劇団高知家青年団の歩みです。		

活動報告

※活動の詳細を以下に自由に記載してください。

文字だけでなく、写真など取り組みの様子や活動の風景なども入れても問題ありません。

※文字の大きさやレイアウトに指定はありません。

※「いつ、誰が、どこで、どのように、何をした、その理由は？」の５W１Hがわかるように、

できるだけ具体的に書くことを心がけてください。

―――＜以下よりご記入ください＞―――

●第一部　きっかけ・背景

１．青年団・社会教育は必要？

2022年11月、高知県青年団協議会は55周年を迎えました。

50周年から5年、社会情勢はもちろん、青年団を取り巻く状況・環境も大きく変遷していく中で、高知県内の青年団もこれまで以上に大変厳しい状況にありました。コロナ禍でこれまで当たり前に出来ていた活動が出来なくなり、人と会うことすら気をつかうことや、色々なことから距離感だけでなく心も閉ざしてしまうことも増えたと感じます。

多様なモノや選択肢に溢れ混沌とする社会、あちこちで「個人の自由」が叫ばれる今、「青年団・社会教育は必要か？」を一つ大きなテーマに、これからの進路を各地域団・地域青年はもちろん、OBOGのみなさん等、地域に関わる多くの方々と共有・一緒に考えていきたく、『55周年記念行事』の開催を決めました。

55周年記念行事開催チラシ→

２．なぜ今、“舞台発表”？

55周年事業を開催するにあたり、「今の現役の姿・想いをまっすぐに伝える手段はないだろうか？」と考えた時、真っ先に「舞台発表」が浮かびました。昨年度高知県団として合唱プロジェクトに取り組み、メンバーみんなが心ひとつに“発信”することの楽しさや、やりがいを感じることができました。今度はそれをさらに増幅させ、またより自分たちの意思や想いを乗せる手段として、青年団の先輩方も昔から取り組んでいた“舞台発表”をみんなでやってみたい！また、現役メンバーがいきいき発信する姿を多くの人に届けたい！そう思い取組み始めました。

３．テーマは「北海道開拓物語」♪

舞台発表を行う上で大事なテーマ設定。これまでも、ジョン万次郎など高知県出身の偉人をテーマにした寸劇を行ったこともありました。そして今回テーマを決める上で大きなきっかけとなったのが、高知県の津野町と姉妹都市であり、青年団・社会教育を大事に取り組まれている北海道の訓子府町（くんねっぷちょう）の菊池一春町長との出会いでした。

若い頃から町の青年団や社会教育の推進に携わられた菊池町長から、「今の北海道・訓子府町の成り立ちは、明治時代高知県の当時の若者が未開の地に来て奮闘した経緯がある」と、お話しをお聞きした時、今の自分たちと同世代の高知の青年たちはなぜ北海道に行ったのだろう？そこでどんな暮らしをしていたのだろう？と大変興味が湧きました。

興味を持った自分たちは、図書館で調べたり、実際に北海道の訓子府町や北見市など、土佐人が開拓したと言われる地域に足を運び、当時の開拓者たちの想いに触れることに。その中で、北海道開拓団のリーダーとして奮闘した坂本龍馬の甥っ子、「坂本直寛（ちょっかん）」さんを知りました。彼の呼びかけに土佐の若者百人が「北光社（ほっこうしゃ）」という開拓団の旗の下に集い、そして北海道開拓に乗り出す…。

「当時の若者はなんでわざわざそんなしんどいことするが？」

最初はそんな思いも沸いてきましたが、理由は一つ、

「自分たちの理想とする社会・国をつくりたかったから」。

明治維新から30年が経った頃、明治政府の現状に不満を持ちつつも、武力や言論も通じず、政府の言いなりになっている社会や、外国の侵攻に対する脅威に対して「このままじゃいかん」と行動に起こした当時の土佐の若者たち。

調べれば調べるほど、国や社会への不満をただ周りにぶつけるのではなく、仲間と一緒に立ち上がって、自分たちの理想を実現するために動いた当時の若者が、今の自分たち青年団活動とリンクされ、熱い気持ちがふつふつと込みあがってきました。

「今どき青年団って、大変やのにどうしてやるの？」

活動をしているとそういった声が聞こえることもありますが、昔も今も一緒だと思いました。今の社会や自分たちが直面している大きな問題である人口減少。「個人の自由」ももちろん大事ではありますが、これまで以上に一人一人が地域・組織の“主体者”となって責任を持つ・行動に移すことが大事だと思うし、それを若者は一人ではなく周りにいる人・仲間と社会教育や青年団活動を通して学んでいく。そんな自分たちが活動を続ける意味を改めて考えさせられました。

そんな土佐人のDNAを、舞台発表を通じて若者が体感し、またそれを発信したい！そんな思いから、この「劇団高知家青年団」のプロジェクトはスタートしました。

↑訓子府町菊池町長訪問

↑坂本直寛氏

↑土佐人による開拓団「北光社」

●第二部　復活（?!）劇団高知家青年団♪

１．練習スタート♪西へ東へ…

高知県下、東は田野町、西は土佐清水から集まった約２５名の演者での練習は、移動時間５時間もの物理的距離に阻まれ簡単にできるわけもなく、しばらくは高知中央・幡多（高知県西部）と分けての練習。

「坂本ちょっかん…？」「なんでまた北海道？」と初めは誰が誰だか分からない状態からの練習でしたが、回を重ねるごとに「自分が演じてるこの人はこんな人やないろうか」「このシーンはこうしたほうが…」といったやりとりも生まれ始めました。

特に今回、印象的だったのは土佐清水市青年団長、宮﨑果七（はてな）さん。
21歳と演者の中で最年少でしたが、彼の素直な言葉、感じたことを次に活かす行動力は、周りのメンバーをも巻き込み大変刺激を受け、またこのプロジェクトの推進力となりました。

県内各地での練習の様子

２．「本番は、前入りで！」

このセリフ、大変失礼ながら主催する私達もびっくりの当事者意識がの芽がにょきにょきっと伸びた瞬間でした。

土佐清水市にて、県下から演者メンバーが集まり合宿をした時の話。

55周年イベントの前に一度人前で披露する機会が大事だと、土佐清水市青年団OBの皆様に披露させていただきました。披露した後、土佐清水市青年団団長宮﨑くんを幼い頃から知っているOBの皆さんから

「劇をするというからどんなものかと思っていたけど、一生懸命さが伝わって良かった！まだまだ練度が必要やと思うから本番まで練習頑張ってね。」と嬉しいお言葉をいただきました。

その後に宮﨑くんが言った「僕の小さい頃を知っちゅう人にいつもとは違う顔を見せたいと思って演じた。」の一言にはOBのみなさんはもちろん、仲間の自分たちも心強く感じられました。

そして、その翌日に土佐清水市斧積地区の地域の方に披露した時。

顔をよく知ったOBの方々ではなく、初めましての地域の方々を前に全員大緊張！宮﨑くんは昨日の披露より上手くいかなかったのか、演じ終わった後の反省の一言
「昨日OBの皆さんに褒められて、嬉しくて天狗になっちょりました…」
はとても可愛らしい素直さにその場がほっこりしました。

一生懸命すればいいだけではもったいなく、誰に何をどう伝えたいか、どう演じるかの目標も必要なのだと実感した瞬間でした。

さらにみんなが一つになって取り組んでいこう！となった合宿のラスト
「本番は、前入りで！」
「前日からしっかり高めて本番を迎えよう！」
「土佐清水からも仕事終わりに駆けつけるけん！」
それぞれの演者から湧き出る言葉は、僭越ながら大変ありがたく、また嬉しい瞬間でした。

土佐清水市合宿の様子

土佐清水市OBOGのみなさん・地域のみなさんへの初披露

３．いざ、高知県青年団55周年記念行事 本番

55周年記念事業当日。会場の高知県青年会館にはOBOGのみなさんや地域の方々、これまでお世話になった方など約60名の方々にお越しいただき、緊張感漂う雰囲気でした。

そんな中、本番しか参加できなかった演者も宮﨑くんの意気込みに自然と巻き込まれ、本番の舞台袖、上手と下手で（頑張るぞ！）（頑張れよ！）のガッツポーズ合戦。演じている途中の（あんた次のセリフ忘れなよ…）のアイコンタクトや舞台袖で一つの台本をみんなで覗き込んで確認し合うなど、裏側でしか見えないやりとりが潜んでいました。

これ！まさにこれが青年団なのではないか…！

若者が集える環境、それぞれに与えられた役割を自分なりに噛み砕き・自分たちの言葉で発信する、そして刺激し合い、協力して、反省してまた次に活かそうとする気持ち。
ただ、この若者の気持ちは舞台発表を見てくださる皆さんがいなければ、ただの自己満足にすぎません。見てくれるから頑張ろう！応援してくれたから頑張ろう！そんな目には見えないやりがいも感じられた舞台発表でした。

本番の様子

４．トモニ＊コレカラヲ♪

今回ご紹介したエピソードの他にも、練習ではセリフがなかなか覚えられず上手く演じ

今回と紹介した エピソードの他にも、練習ではセリフがなかなか覚えられず上手く演じられなかったメンバーが、前入りで盛り上がりすぎて当日朝まで酔っ払っていたのにも関わらず、本番は素晴らしい演技をした話や、「なんでイキイキしゆうが?!舞台でイキイキせんと普段の青年団活動もしっかりしいや！」と女子メンバーからのセリフにドキッ！となる男子たちだったり…。など振り返ればハイライトだらけな「劇団高知家青年団」。
いつかこのハイライトを生で地域の方々にお届けできるよう、また高知県青年団協議会としても環境を整えていきたいと思います。
今回のプロジェクトにメインで関わったのは、県内各地の地域団の団長・団員、また青年団を復活させたい！と地域で奮闘するメンバー。本番では、劇には参加できなかったものの、同じ団で活動する団員が舞台で頑張る姿を見て刺激を受け、「やってみよう！」と奮起したメンバーも。関わった一人一人の楽しい！や学び・成長はもちろん、それぞれの団に持ち帰って、今後の活動がよりワクワクするものになるよう、これからもサポートしていきたいと思います。
最後に、やはり私達にとって青年団・社会教育は“必要”です。今回のプロジェクトを通じて、より確かに感じました。先輩たちが培い繋いできて、私たちも残していきたいこの場所を、大事に次へと届けていきます。

長くなりましたが、振り返れば土佐清水合宿での『本番は前入りで！』のひと言は成功必至でした♪
３月には青年団OBの方にお声かけいただき、土佐清水市にて開催される“公民館サークル発表会”のスペシャルプログラムにて劇団高知家青年団での発表を行います。今後も県内各地の青年たちと一緒に取り組みたい舞台発表。
トモニ＊コレカラヲ、一緒につくり・発信し、地域・青年団を盛り上げていきたいと思います。

←劇団高知家青年団ダイジェスト（前編）

←劇団高知家青年団ダイジェスト（後編）

教宣大賞　受賞

舞鶴町青年会（大分県）

舞鶴町青年会新聞
ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介

※「舞鶴町青年会新聞」並びに「ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介」は別々にご応募いただきましたが、どちらも連携した取り組みとなっておりますので、２作品で教宣大賞を受賞いたしました。

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・自由記述）

応募団体名	（ふりがな）　まいづるまちせいねんかい 舞鶴町青年会	応募部門	□　地域活動の部 ■　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　まいづるまちせいねんかいしんぶん 舞鶴町青年会新聞		
活動実施日	令和３年　　３月　　１日　～　　年　　月　　日		
活動場所	大分市舞鶴町及びその周辺地域		
関係者数	２人（編集長（広報担当）・会長）	参加者数	７人（執行部）
活動概要	舞鶴町青年会は、平成２７年発足の歴史が浅い組織です。認知度向上のため、活動の詳細や行事に込めた想い等を広報活動で周知することで、町内の皆さんに理解を深めていただき、また、活動の楽しさや魅力を感じていただきたいと思っています。スマホやSNSに馴染みがない世代にも見てもらいやすいように、紙ベースの広報紙発行の意義は大きいと感じています。地域社会の全ての世代へ向けた広報活動を展開することで、活動が地域全体を巻き込んだものになり、世代間交流や次世代への事業の承継にも繋がると考えます。		

※活動の詳細を以下に自由に記載してください。
文字だけでなく、写真など取り組みの様子や活動の風景なども入れても問題ありません。

―――＜以下よりご記入ください＞―――

■活動のきっかけ、事業をつくるうえで参考にしたこと、準備期間に関すること等

舞鶴町青年会は、平成２７年の発足以降、行事開催の際の事前告知として、案内文書を作成し、町内回覧を行っていた。しかし、単発での行事のお知らせに留まり、地域の皆さんに行事の詳細やそこに込められた想いなどを伝えるに至らなかった。また、事後の活動報告を行っていなかったため、活動の成果、組織の魅力等を発信できていなかった。
そこで、執行部に広報担当者を置き、より幅広い世代への情報発信として定期的な広報誌の発行と、スピード感を持って情報を伝えるウェブサイトによる広報を開始した。

■主な活動内容の詳細

≪広報誌の発行≫
新型コロナウイルス感染症が蔓延する中、小規模での活動を余儀なくされ、職業柄参加を控える方や体調面に不安がある方等を考慮し思うような行事ができなかった。これらを受け「自粛に沈む気持ちを少しでも払いたい。」「明るい話題を届けたい。」という思いから、まずは小さな活気を取り戻すべく広報誌を発行することとした。令和３年４月から舞鶴町を中心に１回あたり５００部を発行し、自治会の協力による「回覧」と、青年会の会員による「集合住宅のポスト投函」の二通りの方法を行っている。これまで発行した記事の主な内容は以下のとおり。

⑴　山車（やま）特集
　町内の魅力を伝えるフラッグシップとしての山車の特集コーナー
⑵　長濱祭（ながはままつり）
　神輿や山車の巡行経路図を掲載するとともに、神社や祭の由来等の文化を紹介
⑶　開催報告や開催行事の告知
　ＳＤＧｓの勉強会やチキリン体験教室の告知等

■活動における工夫点

行事の事前事後の情報発信をしっかりと行い、住民の皆さんにも活動を認知していただけるようにした。従前は単発の回覧による告知のみであったが、令和３年度より広報誌やホームページによる発信をスタートさせたことで、より分かりやすく活動情報をお届けできるようになった。広報誌の内容・工夫点は以下のとおり。

１　広報誌の愛称を募集する等参加型とし、興味を持ってもらえるようにした。

２　ＱＲコードを利用した応募フォームを設け、容易に応募（参加）できるようにした。

３　祭等の行事において特集記事を発行した際は、ＨＰサイトと連携して紙面とデジタルデバイスでの閲覧を可能とした。

■活動の成果、今後の展望に関すること等

以前は、行事前にチラシを作成して周知を行っていたが、広報誌を定期的に発行することで行事以外の青年会活動を周知でき、行事の参加者が増加した。令和３年の長濱祭では、町内の子供神輿は自粛により中止となったが、当会では少しでも元気を届けたいという思いから山車の巡行を決定し、広報誌に経路図を掲載して周知をした。それを見た子供達が興味を示し、公園や沿道から声かけてくれたり、山車の後に付いてきたりと、活気ある光景が見受けられた。舞鶴町にある山車は、新調されて間もないことから、今後、装飾していく過程などを広報誌で紹介するとともに、記録として残すことは、文化を継承するという点において重要な位置付けであると考える。

今後は、装飾の様子や日頃見ることが出来ない「山車の組み立て」、「山車と町内の歴史」等、祭を飾る内容を紹介し、祭の中心に次世代の担い手を据え、祭文化を継承していきたい。そのためにも、まずは興味を持ってもらうために、広報誌等を通じて様々な情報を発信していきたい。

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・自由記述）

応募団体名	（ふりがな）　まいづるまちせいねんかい 舞鶴町青年会	応募部門	□　地域活動の部 ■　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　うぇぶさいとをりようしたせいねんかいのかつどうしょうかい ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介		
活動実施日	令和３年　　６月　　１０日　～　　年　　月　　日		
活動場所	大分市舞鶴町及びその周辺地域		
関係者数	１人（広報担当）	参加者数	７人（執行部）
活動概要	舞鶴町青年会は、平成２７年発足の歴史が浅い組織です。認知度向上のため、活動の詳細や行事に込めた想い等を広報活動で周知することで、町内の皆さんに理解を深めていただき、また、活動の楽しさや魅力を感じていただきたいと思っています。紙ベースの広報紙発行に加え、広報誌では伝えきれない多くの情報量を盛り込むことができたり、リアルタイムでの情報発信ができるHPやSNSを活用しています。より広範囲に情報発信ができることから、交流や新しいアイデアも生まれ、活動の幅を広げることにも繋がります。		

※活動の詳細を以下に自由に記載してください。

文字だけでなく、写真など取り組みの様子や活動の風景なども入れても問題ありません。

―――＜以下よりご記入ください＞―――

■活動のきっかけ、事業をつくるうえで参考にしたこと、準備期間に関すること等

舞鶴町青年会は、平成２７年の発足以降、行事開催の際の事前告知として、案内文書を作成し、町内回覧を行っていた。しかし、単発での行事のお知らせに留まり、地域の皆さんに行事の詳細やそこに込められた想いなどを伝えるに至らなかった。また、事後の活動報告を行っていなかったため、活動の成果、組織の魅力等を発信できていなかった。

そこで、執行部に広報担当者を置き、より幅広い世代への情報発信として定期的な広報誌の発行と、スピード感を持って情報を伝えるウェブサイトによる広報を開始した。

■主な活動内容の詳細

掲載したい記事や写真データなどを執行部で持ち寄り、内容を協議・校正した上で、広報担当者の手でホームページにアップロードしている。

広報誌では紹介しきれない、またはタイムリーにお届けしたい情報については、ホームページやＦａｃｅｂｏｏｋ並びにインスタグラム等の各種ＳＮＳを活用しての情報発信を行っている。紙ベースの広報誌よりも多くの情報をより広範囲に発信できる外、若い世代の目にも触れやすく、活動を認知してもらいやすい。

■活動における工夫点

祭等の行事において青年会新聞にて特集記事を発行した際は、ＨＰサイトと連携して紙面とデジタルデバイスでの閲覧を可能とした。

写真や動画などを通じて、視覚的に分かりやすく活動の様子を伝えている。

■活動の成果、今後の展望に関すること等

以前は、行事前にチラシを作成して周知を行っていたが、広報誌を定期的に発行することで行事以外の青年会活動を周知でき、行事の参加者が増加した。広報誌に加え、ホームページでの情報発信を行うことで、受け手としては、パソコンやスマホがあれば、いつでもどこでも情報を得ることができるようになり、また、広報誌が回覧として回っている家庭にとっては、回覧が終了して紙ベースの広報誌が手元に無くても、情報を確認することができる。特に、お祭りにおける山車やお正月の御獅子さまの巡行については、手元に経路図が無いと通過時間が確認できないため、回覧後でもそうした情報を見ることができるホームページは、とても有用だと考える。

地域社会の DX も今後ますます進んでいくと思われる。子育て世代など、なかなか時間が作れない人たちが多い青年層にとって、仕事や子育ての合間を縫って、日々の生活の中からいかに地域の為に時間を作って活動するか、ということで苦労している人も多い。顔を合わせる、温かみがある、地域の歴史と伝統と地域社会の根幹部分はしっかりと維持しつつ、自動化・デジタル化を上手に併用・活用しながら、前例に捕らわれない新しい発想で地域での活動を展開していきたい。

準教宣大賞　受賞

羽咋市青年団協議会（石川県）

団員募集（チラシ）

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・設問有り）

応募団体名	（ふりがな）はくいしせいねんだんきょうぎかい 羽咋市青年団協議会	応募部門	□ 地域活動の部 ☑ 教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）だんいんぼしゅう 団員募集		
活動実施日	2022年 4月 29日 ～ 2023年 4月 28日		
活動場所	羽咋市合同事務所内　羽咋市青年団協議会　団室		
関係者数	6名	参加者数	
活動概要	（200字程度） 現在、隔週の集まりに集まれる団員は2、3名。そこからいかに協力者を集めるかが事業を行う際の課題となっている。 それでも、春の『タケノコ掘り事業』、若者層に男女の出会いに限らない交流の場を提供する『交流パーティ』、冬の定番『サンタ宅配便』を主催運営。 タケノコ掘りをした地域で清掃活動に協力したり、市内の公園でのハロウィンパーティイベントで出店協力したりと積極的に活動している。		

活動期間　※準備から活動終了までの打ち合わせやリハーサルなど活動を行った年月を時系列で記入してください。

年	月	活動内容（各別にまとめて記入）
2022	12	サンタ事業(24日)終了後、市青協会長の発案でチラシ制作に取り掛かる。
		同時に、二十歳のつどいを担当している生涯学習課の担当者に連絡し、
		承諾を取り付ける。
		年末年始を挟んでいたため、LINEグループのやり取りで団員の意見を
		聞きながらデザインの調整を重ねていった。
2023	1	作成したチラシの配布物セットへの封入作業。
		二十歳のつどい(成人式)当日は運営スタッフとしてお手伝い。
		当日スタッフ後の団員の記念撮影☞

＜アピールポイント＞

①活動の詳細を以下に自由に記載してください。文字だけでなく、写真など取り組みの様子や活動の風景なども入れても問題ありません。
②文字の大きさやレイアウトに指定はありません。
③「いつ、誰が、どこで、どのように、何をした、その理由は？」の５Ｗ１Ｈがわかるように、できるだけ具体的に書くことを心がけてください。

■活動のきっかけ、事業をつくるうえで参考にしたこと、準備期間に関すること等

二十歳のつどい(旧成人式)の当日運営スタッフとしてお手伝い、二十歳のつどい実行委員のお手伝いとして関わらせてもらっていることはある意味アドバンテージであり、新規団員獲得の為に活かせないか、という想いがあった。
今年度はなにか仕掛けていきたいな、どうしようと考えていた会長がサンタ事業終了後に思いつき、比較的短期間で団員を巻き込みながら制作を進めていった。

■活動中の苦労、印象深かったこと等

普段の集まりに集まれるメンバーは2、3人でなかなか寂しく厳しい状況が続いていたが、年末年始を挟んでいたのもあり、羽咋市青協のLINEグループ上でデザイン原案から意見を募り、修正を重ねていった。普段より関わってくれるメンバーが多く、大変心強かった。

■活動の成果、今後の展望に関すること等

二十歳のつどいから1週間でInstagramフォロワーが10名程度増加した。

今後は、チラシの制作時期を早め、二十歳のつどい実行委員会のメンバーの意見を募ることを検討したい。そこで、実行委員との関係性をより深め、そこからの団員獲得に繋げていけたらいいなと思う。

■地元の人たち（参加者）の反応

二十歳のつどい当日、小ホールにも掲示していた拡大コピー版の前で記念撮影している二十歳の参加者たちがいた。

■自由記述欄（各欄で記載できなかったこと等）

アピールチラシの拡大コピー版を小ホールに掲示させてもらったが、羽咋市の二十歳のつどい担当課長から、青年団頑張っているから小ホールのフォトブースの混雑監視がてら拡大コピーを貼り出してもいいよ、との提案を受けた。二十歳のつどい参加者への配布物一式へのチラシ封入を快諾してもらえたのも、青年団の存在が市に認知され良好な関係性が築けているからと思う。市との良好な関係性は維持しつつ、若者層への積極的なＰＲを今後も模索していきたい。

以　上

教宣奨励賞　受賞

日野町連合青年会（滋賀県）

機関紙「ひのせいねん」

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・自由記述）

応募団体名	（ふりがな）　ひのちょうれんごうせいねんかい 日野町連合青年会	応募部門	□　地域活動の部 ☑　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　こうほうかつどう 広報活動		
活動実施日	2022年　4月　1日　～　2023年　3月　31日		
活動場所	日野町連合青年会事務所		
関係者数	4人	参加者数	4人
活動概要	（200字程度） 機関紙「ひのせいねん」は、数十年前の先輩方から受け継いできた伝統です。時代が変化しても、手書きで丁寧に作成するということにこだわり続けてきました。団員数の減少により一人ひとりの負担が増え、数年前より発行回数を減らしていますが、私たちの活動やどのような思いで取り組んでいるかを知ってもらうために、毎号全団員が関わり作成しています。B4更版紙で作成しているのも新聞折込で手に取っていただきやすいように工夫しています。		

活動報告

※活動の詳細を以下に自由に記載してください。

文字だけでなく、写真など取り組みの様子や活動の風景なども入れても問題ありません。

※文字の大きさやレイアウトに指定はありません。

※「いつ、誰が、どこで、どのように、何をした、その理由は？」の５W１Hがわかるように、

できるだけ具体的に書くことを心がけてください。

―――＜以下よりご記入ください＞―――

機関紙「ひのせいねん」は、数十年前の先輩方から受け継いできた日野町連合青年会の伝統事業です。発行回数は。通常版が年に４回、駅伝版が年に２回の計６回発行しています。町民の方々に向けて私たちの活動を発信したり、地域との繋がりを作るために発行しています。作成でこだわっている点は4つあります。まず1つ目は「団員全員で取り組むこと」。記事内容を決めるところから印刷まで、団員全員が関わるようにしています。原稿も全員で校正を行っています。そして2つ目は「手書きで作成すること」。パソコンで作ることの方が簡単で、手書きは手間がかかるのですが、書き手の思いが伝わりやすいように手書きにしています。地域の方々からも「手書きの温かさを感じる」「一生懸命さが伝わってくる」という声をいただいています。3つ目は「見出しの工夫」。参加した事業名をそのまま書くのではなく、読む人が読んでみたいと思ってもらえるような、情景が想像できるような見出し・タイトルにするように心がけています。また、目を引くように文字にも工夫をしたり、トーンなどで効果をつけたりしています。そして4つ目は「地域との繋がり」。連載記事として、「Welcome　OBさん」と「〇〇トーク」があります。「Welcome　OBさん」は日野町連合青年会60周年を迎える際に始めた記事です。歴代の会長さんに当時の思い出を話してもらったり、私たち現役団員へ激励の一言をもらったりしています。なかなか先輩方と繋がることができないですが、この連載のおかげで、歴代の会長の方々と関わることができます。そして「〇〇トーク」については、毎号一つのテーマについて団員内で話し合いその内容を記事にしています。普段話さないことを改めて話すことによって、団員のことをよく知ることができ、楽しい記事になっています。
文章を書くことが苦手な団員も多いので作成には時間がかかります。事業前はやらなくてはいけないことが立て込み、時間の確保が難しくなります。しかし、作成することで私達団員は「相手にどう書いたら伝わるか」や「自分の想いをどうやって伝えるか」など考えることができます。初めて記事を書いたときは文字数が収まらず苦労していた団員も、回数を重ねていくうちに少しずつ書けるようになってきました。また、読んでくださってる地域の方からも「読んでいるよ。いつも頑張ってるね」など嬉しいお言葉をもらうこともあります。
これからも地域にしっかり想いを発信できるよう、団員全員で頑張っていきたいと思います。

田澤義鋪賞　受賞

舞鶴町青年会（大分県）

青年が活躍する　活力あるまちづくり

※地域活動の部にお申込みいただいた実践です。

２０２２年度全国地域青年「実践大賞」
アピールレポート（共通・自由記述）

応募団体名	（ふりがな）　まいづるまちせいねんかい 舞鶴町青年会	応募部門	■　地域活動の部 □　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　せいねんがかつやくする　かつりょくあるまちづくり 青年が活躍する　活力あるまちづくり		
活動実施日	平成２７年　　４月　　１日　～　　年　　月　　日		
活動場所	大分市舞鶴町及びその周辺地域		
関係者数	３０人	参加者数	５０人程度
活動概要	舞鶴町は、昭和４０年代に青年団が解散して以降、青年層の組織が存在しなかった。しかし、地域が盛り上がるには、青年の活躍が必須であると考えた住民有志が集まり、舞鶴町青年会を発足させた。 当会では、お祭りや懇親会を中心に、年間を通じて青年層が集まる機会を創出し、これにより地域にまとまりと活気を生み出すべく活動を行っている。将来的には、地域を担う人材の発掘と育成や、伝統文化の継承等、持続可能な地域社会構築を目指している。		

活動報告

※活動の詳細を以下に自由に記載してください。

文字だけでなく、写真など取り組みの様子や活動の風景なども入れても問題ありません。

※文字の大きさやレイアウトに指定はありません。

※「いつ、誰が、どこで、どのように、何をした、その理由は？」の５Ｗ１Ｈがわかるように、できるだけ具体的に書くことを心がけてください。

―――＜以下よりご記入ください＞―――

■活動のきっかけ、事業をつくるうえで参考にしたこと、準備期間に関すること等

転居を伴う就職や進学等による住環境の多様化に加え、近年ではマンションも多く建設されるなど、町内の住民は以前より流動的である。多くの方が転入されてきたが、新たに町内の一員となった方々との接点に乏しく、住民の皆さんを地域に取り込んでいくのが困難であった。こうした事情から、町内会組織の高齢化、地域と住民もしくは住民相互の繋がりの希薄化、祭をはじめとする地域の伝統文化の担い手不足や継承問題といった課題に直面した。

上記課題の解決には、青年が積極的に地域と関わり、地域の活動を活発化させることが必要であるとの認識に至り、青年会設立準備会を立ち上げ、約半年の準備期間を経て青年会を発足させた。

■主な活動内容の詳細

持続可能な地域社会構築に向けて、青年層が集まる場を創出することで、地域にまとまりと活気を生み出したいと考えた。当会会員及び町内青年層を対象とした各種行事の企画運営と、町内会行事の準備運営助成が主な活動である。

★青年会行事

1　流しそうめん・おでん・鍋・BBQ 等の各種懇親会

年間を通じて懇親会を開催し、顔を合わせる機会を増やすことで親睦を深めるとともに、町内外を問わず会員以外の方々にも積極的にお声がけすることで、入会の勧誘や世代間または地域を越えての交流を行っている。

コロナ禍では自粛を余儀なくされたが、令和４年１０月には３年ぶりにＢＢＱ懇親会を開催し、会員はもちろん、近隣町内の町内会長も招待して、意見交換を行った。

2　新春　御獅子さま巡行

町内の皆さまの無病息災を祈念するとともに、神社へお参りに行けない高齢者の皆さまへお正月の雰囲気をお届けしようと当会設立当初から始めた行事。毎年１月３日に町内全域を巡行しており、平成３０年には中島錦町線の全線開通を祝して長濱神社氏子九町内全域を練り歩いた。

３　長濵神社夏季大祭

当地区最大の地域行事である長濵祭。老若男女が集い、世代を超えて楽しむことができるお祭り文化は、準備や祭礼行事を通じて地域の文化に触れることができる数少ない機会である。

当初は、子供神輿や宮神輿の渡御に参加するのみであったが、平成３０年に、市内一の高さ６ｍを誇り、独自の形状に設計した「豊後長濵型せり上げ式人形山車」を新調して巡行を行っている。

令和２年・３年・４年はコロナ禍での祭礼となり、規模縮小を余儀なくされた。しかし、何もしないのではなく、どういう形態ならできるのかを検討し、可能な範囲の行事を開催することを目標として計画した。

都市部の夏祭りは、疫病蔓延や自然災害等の災厄を神様に封じて貰おうとの意味合いを含むといわれている。コロナ禍においては、そうした夏祭りの起源を見つめ直し、本来の意義を再認識してもらうお祭りとして位置づけ、以下のとおり祭礼関係行事を実施した。

【令和２年】

コロナ禍に入って最初の祭り。各地で神賑行事は全て中止で神事のみの祭礼となる中、右に倣えで行事を中止するのではなく、アイデアを出し、コロナに屈しない姿勢を見せることが、自粛で沈みきった地域に勇気と明るい話題を提供できると判断。自治会を説得し、青年会独自の行事の開催を決定した。

長濱神社にて疫病退散祈願神事を実施後、疫病を祓うとされる御獅子さまを手作りの台座に載せ、長い担ぎ棒を付けることで担ぎ手同士の距離を確保する等の新型コロナ対策を講じた上で、町内を巡行した。

【令和２年７月６日　大分合同新聞】

"菌"を払う金の御獅子さま

大分市の舞鶴町青年会

【大分】大分市の舞鶴町青年会（古田裕樹会長）は5日、悪病を払うとされる「御獅子さま」の行事を催した。獅子頭を載せた台をメンバーが担ぎ、新型コロナウイルスの終息を願いながら町内と長浜町を歩いた。

例年7月5～7日に開かれる長浜神社夏季大祭（長浜さま）のみこし巡行や神楽が中止され、神事のみとなったことから、「地元の青年会として自分たちでできることを」と企画した。

時節柄、担ぎ手同士の距離を保てるように台を手作りした。行事も人数を最少限に絞り、11人で実施。太鼓を打ち鳴らし「疫病退散」「コロナに負けるな」と声に出しながら、住宅街や事業所が並ぶ市道をゆっくり歩いて回った。途中、長浜神社で神事をし、新型コロナの鎮静と新薬・ワクチンの早期開発を祈願した。

母親らと同神社を訪れていた衛藤千弦ちゃん(4)＝城崎町＝は御獅子さまを見て「かわいくてかっこいい」と大喜び。特製のシールをもらい、「コロナに負けないように元気に頑張ります」と笑顔を見せた。

古田会長(39)は「災厄を封じるために始まった夏祭りの意義を再認識し、来年の大祭に心をつないでいきたい」と話していた。

（玉井美智子）

「御獅子さま」を担ぎ、「疫病退散」と声に出しながら住宅街などを歩く＝5日、大分市長浜町

新型コロナウイルスの早期終息などを願うメンバー

【令和３年・令和４年】

「前年よりも少しでも前進、今できることを精一杯やりきる。」という意気込みで臨んだ令和３年・４年の大祭では、伝統行事ではあるが、前例に縛られることなく、時代に合わせた柔軟な発想での企画を行い、以下のような取り組みを実施した。

⑴　情報収集

全国で祭礼を実施したという事例があれば、宮司さんや運営責任者と連絡を取り、情報収集に努めた。

⑵　新型コロナ対策及びガイドラインの策定

準備から祭礼行事等全体を網羅する新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインを策定した。また、従来の手指消毒やフィジカルディスタンス確保等の対策に加え、寄付・お賽銭に非接触型決済（ＰａｙＰａｙ）を導入する等、新しい試みも行った。

⑶　山車巡行

祭礼に先立って、祭礼直前の日曜日（令和３年は７月４日、令和４年は７月３日）に疫病退散祈願神事及び町内を清める巡行を、５日の宵祭りにおいて神賑行事としての巡行をそれぞれ実施する等、日程を分散した。

令和４年の長濱祭については、規模縮小ながらも、従来の歩行者天国が復活したため、多くの人出で賑わう神社周辺を盛大に巡行した。

長濱神社
夏季大祭
ガイドラインを策定した
新しい試みによる祭

⑥疫病退散を願って山車巡行
大分市の長浜神社夏季大祭を前に、新型コロナウイルスの早期収束を願い、山車が市内を巡行した。5日にも山車の巡行、6日には神幸祭やみこしの巡行などがある。

【令和３年７月５日　大分合同新聞】

型会　トメ友

山車を持って練り歩く舞鶴町青年会のメンバー＝4日、大分市長浜町

疫病退散を願って長浜神社の山車巡行

大分市の舞鶴町青年会

【大分】大分市の舞鶴町青年会が4日、「雨の長浜さま」で知られる長浜神社の夏季大祭（例年は5～7日）を前に疫病退散を願って山車で巡行した。同会員ら13人が参加した。

同神社で神事の後、新型コロナウイルスの早期収束を願って巡行した。太鼓や笛の音を聞きつけた沿道の人が山車を見送った。同会の古田裕樹会長(40)は「楽しみにしている人がいるので、少しでも地域の人を笑顔にしたい」と話した。

5日に山車の巡行、6日に神幸祭やみこしの巡行などがある。新型コロナ感染拡大防止のため、歩行者天国や露店の出店、神楽の奉納を中止する。

（中村みを）

挑戦の心忘れずに

大分市老人ク連

60歳以上。電子マネーの購入を指示されたら一人で判

⑷　チキリン親子体験教室（令和３年：全８回、令和４年：全７回）

町内子供神輿については、令和２年・３年と２年連続での中止となり、子供向けのチキリン（長濱祭囃子）練習会も自粛された。令和４年の練習会は回数制限を設けたこともあり、十分に練習時間が確保できなかった。そこで、子供達の地域文化体験・修得の機会を回復することを目的に、小中学生とその親を対象に文化庁「子供たちのための伝統文化体験機会回復事業」として「チキリン親子体験教室」を開催した。

参加した子供からは、「人数制限でお祭りが経験できなかったので、太鼓が叩けて嬉しい。」「年間を通じて定期的に開催して欲しい。」といった声が寄せられ好評であった。

４　勉強会等

持続可能な地域社会構築のため、ＳＤＧｓについての勉強会を開催した。基礎知識を学んだ上で、舞鶴町・長浜地区といったより身近な話題にＳＤＧｓの考え方を落とし込むことで、自分たちにできることが理解できた。また、当会の各種活動についても、ＳＤＧｓに関連付けて考えるようになり、バックキャスティングで中長期的な将来ビジョンをイメージするといった意識改革に繋がった。

大分市の佐藤樹一郎市長を公民館にお招きし、ふれあい市長室を開催した。青年会の活動を紹介し、私たちの想いをお伝えした。会員には子育て世代が多く、子供の医療費の助成について提言を行ったメンバーもいた。後日、市役所の担当部署からの連絡を受けて制度について協議をするなど、行政を動かすことにも繋がった事例があり、私たちの活動の意義の大きさを実感した。

前段中央：佐藤市長
前段左から３番目
：酒井舞鶴町町内会長

５　広報活動

⑴　広報誌の発行

新型コロナウイルス感染症が蔓延する中、小規模での活動を余儀なくされ、職業柄参加を控える方や体調面に不安がある方等を考慮し思うような行事ができなかった。これらを受け「自粛に沈む気持ちを少しでも払いたい。」「明るい話題を届けたい。」という思いから、まずは小さな活気を取り戻すべく広報誌を発行することとした。令和３年４月から舞鶴町を中心に１回あたり５００部を発行し、自治会の協力による「回覧」と、青年会の会員による「集合住宅のポスト投函」の二通りの方法を行っている。これまで発行した記事の主な内容は以下のとおり。

ア　山車特集

町内の魅力を伝えるフラッグシップとしての山車の特集コーナー

イ　長濱祭

神輿や山車の巡行経路図を掲載するとともに、神社や祭の由来等の文化を紹介

ウ　開催報告や開催行事の告知

ＳＤＧｓの勉強会やチキリン体験教室の告知等

⑵　ホームページや各種ＳＮＳによる情報発信

広報誌では紹介しきれない、またはタイムリーにお届けしたい情報については、ホームページやＦａｃｅｂｏｏｋ並びにインスタグラム等の各種ＳＮＳを活用しての情報発信を行っている。紙ベースの広報誌よりも多くの情報をより広範囲に発信できる外、若い世代の目にも触れやすく、活動を認知してもらいやすい。

６　オフィシャルキャラクターの作成

公募により、青年会オフィシャルキャラクター『まいっつるくん』を作成した。同キャラは、平成２８年４月より活動を開始し、各種印刷物は勿論、缶バッジやオリジナル饅頭の刻印等にも使用して舞鶴町青年会をＰＲしている。令和２年度には、疫病退散を祈願するアマビエバージョンが登場した。

舞鶴町青年会オフィシャルキャラクター
まいっつるくん

★町内会・その他の行事

町内盆踊りの開催協力（会場設営、かき氷、花火等）や大分七夕まつり「神社神輿」、国民文化祭「大分市やま揃え」等へ参加した。

■活動における工夫点

行事を定期的に開催することで、青年層が集まる機会を増やしたり、お祭り等の地域行事に関しては、主に次世代を担う子供たちに伝統文化への興味を持ってもらうため、木札やステッカー（御札）を配布するなどの工夫をした。

また、行事の事前事後の情報発信をしっかりと行い、住民の皆さんにも活動を認知していただけるようにした。従前は単発の回覧による告知のみであったが、令和３年度より広報誌やホームページによる発信をスタートさせたことで、より分かりやすく活動情報をお届けできるようになった。広報誌の内容・工夫点は以下のとおり。

１　広報誌の愛称を募集する等参加型とし、興味を持ってもらえるようにした。

２　ＱＲコードを利用した応募フォームを設け、容易に応募（参加）できるようにした。

３　祭等の行事において特集記事を発行した際は、ＨＰサイトと連携して紙面とデジタルデバイスでの閲覧を可能とした。

https://sites.google.com/view/maizuruyouth/home?authuser=0

■活動の成果、今後の展望に関すること等

青年組織を立ち上げ、活発に活動することで、祭等の地域行事がより活気溢れるものになった。お正月の御獅子さま巡行や、長濱祭における山車の巡行については、しっかりと行事が定着してきており、巡行の際には家の前に出てきて待ってくださっている光景が当たり前のように見られるようになった。巡行時に配布している御札も、毎年楽しみにしてくださっており、中には疫病退散のお守りとして玄関に飾ってくれているお宅もあった。

また、町内会行事についても、盆踊りの会場設営等の力仕事についても、青年層の人手確保はもちろん、行事自体への参加者増加にも繋がり、世代間交流の機会も増加したように感じられる。

その外、個別の取り組みに関する今後の展望は、以下のとおり。

1　広報活動

以前は、行事前にチラシを作成して周知を行っていたが、広報誌を定期的に発行することで行事以外の青年会活動を周知でき、行事の参加者が増加した。令和３年の長濱祭では、町内の子供神輿は自粛により中止となったが、当会では少しでも元気を届けたいという思いから山車の巡行を決定し、広報誌に経路図を掲載して周知をした。それを見た子供達が興味を示し、公園や沿道から声かけてくれたり、山車の後に付いてきたりと、活気ある光景が見受けられた。舞鶴町にある山車は、新調されて間もないことから、今後、装飾していく過程などを広報誌で紹介するとともに、記録として残すことは、文化を継承するという点において重要な位置付けであると考える。

今後は、装飾の様子や日頃見ることが出来ない「山車の組み立て」、「山車と町内の歴史」等、祭を飾る内容を紹介し、祭の中心に次世代の担い手を据え、祭文化を継承していきたい。そのためにも、まずは興味を持ってもらうために、広報誌等を通じて様々な情報を発信していきたい。

2　組織拡大

活気ある組織を目指す上で、青年層の取り込みや、子供会を卒業した中高生の勧誘等、少しずつ組織を拡大するとともに、持続可能な組織を目指して、次世代の育成にも力を入れていきたい。

また、近隣町内の青年組織と交流・連携する等、地域横断的な交流を通じて、長浜校区並びに長濱神社氏子町内を活性化していきたい。

3　地域の伝統文化の継承

祭を始めとする地域の伝統文化には、時代を越えて積み重ねられた地域の文化が凝縮されており、唯一無二の各地固有の文化である。地域の歴史・伝統を肌で感じられる貴重なものなので、そういった素晴らしい文化に、今を生きる私たちの想いも載せて、次世代へ伝承していきたい。

全国青年 OB 会奨励賞　受賞

もりやま青年団（滋賀県）

フォト映えスポット＠こんにちワーク

※教宣活動の部にお申込みいただいた実践です。

２０２２年度全国地域実践「実践大賞」
アピールレポート（共通・設問有り）

応募団体名	（ふりがな）　もりやませいねんだん もりやま青年団	応募部門	□　地域活動の部 ■　教宣活動の部
活動名称	（ふりがな）　ふぉとばえすぽっと@こんにちわーく フォト映えスポット@こんにちワーク		
活動実施日	2022年　11月　1日　～　2022年　11月　1日		
活動場所	守山市北公民館、もりやまエコパーク交流拠点施設		
関係者数	29名	参加者数	延べ250名
活動概要	（200字程度） 小学生を対象にものづくりや職業体験を行った。9つのブースがあり、青年団の得意分野を活かしたものや、地域のおとなが主体となって行うブースを設けた。青年団は、職業を活かした看護師ブース、興味関心のあるハンドメイド雑貨やエコブースなどを行った。本物の警察官や最先端ドローン体験、地域のコーヒーショップ屋さん、地域の鉄道同好会や自動車整備屋さんにもご協力いただき、普段では簡単に体験できないことを経験する機会となった。青年団ブースでは、子どもの楽しそうな笑顔や真剣な眼差しを目の当たりにし、子どもと関わる楽しさと青年団のやりがいを改めて感じる機会となった。		

活動期間　※準備から活動終了までの打ち合わせやリハーサルなど活動を行った年月を時系列で記入してください。

年	月	活動内容（各別にまとめて記入）
2022年	9	こんにちワーク10の準備開始。ブース検討。
		会場下見。
	10	ブース内容詳細決定。
		地域商店、団体、警察署に依頼しに行く。
		チラシが完成し、市内の小学校に配布する。
		ブース看板を製作。
	11	フォトスポットの提案。
		フォトスポットの製作。
		会場最終下見。

＜アピールポイント＞

①活動の詳細を以下に自由に記載してください。文字だけでなく、写真など取り組みの様子や活動の風景なども入れても問題ありません。
②文字の大きさやレイアウトに指定はありません。
③「いつ、誰が、どこで、どのように、何をした、その理由は？」の5W1Hがわかるように、できるだけ具体的に書くことを心がけてください。

■活動のきっかけ、事業をつくるうえで参考にしたこと、準備期間に関すること等

こんにちワークをやる上で撮影スポットを作りたいと思った。撮影スポットの背景としてすぐにイメージされたのは、記者会見等でよく目にする、方眼紙のように正方形が並び、ロゴマークや団体名などが規則正しく記されている撮影用の背景であった。もりやま青年団のそれががほしいと思い、いつもお世話になっている地域のオリジナルプリント屋さんに問い合わせてみたが、日程と予算的に難しいことが判明した。しかし諦め切れず、団員との会話の中で、何気なく話してみた。イメージ画像を見せ「こんな背景がほしいねんな～。撮影スポット作りたいねん」と話すとそれを聞いた副団長が「つくりましょう！」と言ってくれた。様々な準備が前日までかかっている中、撮影スポットの製作に本格的に取り掛かったのは前日であった。誰一人嫌な顔せず、むしろ楽しんで取り組んでいるその姿は団長である私が一番救われたと思う。

■活動中の苦労、印象深かったこと等

副団長を中心に撮影用背景を作ってくれた。印象的だったのは「好きな言葉何ですか？」とみんなに聞いて回り、正方形の中にその文字を書いていたことだ。もりやま青年団を略した「MORI-SEI」という言葉だけでは、もう少しオリジナリティに欠けていたが、団員の好きな言葉を入れることで、みんなの気持ちがその背景に込められているあるように感じられた。カラフルに塗られた正方形と言葉の書かれたその背景は、プリントされたものでは表現できないオリジナリティがある。完成された背景を見たとき、ポロっと言ったことが実際に形になったというううれしさと、それを形にしてくれた団員への感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

■活動の成果、今後の展望に関すること等

フォトアイテムは、もりやま☆こんにちワーク１０で体験できる職業にまつわるアイテムを団員が作ってくれた。看護師や警察官の帽子、コーヒーショップのカップ、自動車整備士のタイヤなどなど、準備から参加してくれていた高校生に製作をお願いしたが、完成度は期待以上のものであった。高校生もまた、製作をきっかけに周りから「すごい！」「めっちゃかわいいなぁ」と褒められて、青年団を「たのしい！」と思ってくれたのではないかと感じる。そのアイテムを使って写真を撮っている団員や当日参加した親子の楽しそうな姿は、きっと作ってくれた高校生たちの心にもずっと残っていくはずだ。団員の得意分野を活かし、一人ではできないことをみんなで取り組むことは青年団の醍醐味であり、それが今回も体感できたということが今後の希望である。

■地元の人たち（参加者）の反応

当日参加した子どもがアイテムを手に取り楽しそうにしている姿、またそれを撮影している保護者もうれしそうであった。親子で撮影している姿もあり、笑顔で映っている写真と共に楽しい思い出として心に残っていくことを願う。

■自由記述欄（各欄で記載できなかったこと等）

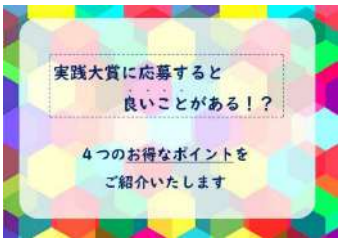
大人であればほぼ全ての人がスマートフォンを持っている今、簡単に写真を撮り、楽しむ文化がある。青年団でも撮影スポットを企画し、他の団には無いオリジナリティのある楽しく・映える撮影スポットを作りたかった。「こんなん作ってみたいねんな～」という一言から仲間が賛同してくれ、言い出した自分ではなく誰かが中心になって取り組んでいる姿を見たときは、「もりやま青年団、まだまだ大丈夫だな」と思った。青年団人口が減り、次世代に繋げていくことの難しさを感じる中、何かにとらわれず、楽しく自由な発想で楽しむことができるのは、もりやま青年団の良さである。この自由さを保ちながら、自分たちのやりたいことを自分たちが楽しみながら活動を続け、次世代に繋げていきたいと思う。

以　上

◆２０２２実践大賞 PR ムービーはこちら

・検索方法：YouTube で「実践大賞」と検索

・イメージ：



・ＱＲコード：

◆２０２２実践大賞結果速報ムービーはこちら

・検索方法：YouTube で「実践大賞」と検索

・イメージ：

・ＱＲコード：

◆日本青年団新聞（ユースポスト）のバックナンバーはこちら

・ＵＲＬ：インターネットで「日本青年団新聞」と検索

・イメージ：

・ＱＲコード：